



次 目

菩薩行に就て……………	井 本
信行の基調を説ける観普賢經……………	井 村 多
統一團の回顧と自警……………	本 多 日 生
肺結核治療の秘訣……………	奥 田 史 郎
聖訓摘要……………	本 多 日 生
虚妄をつかぬ王様……………	三

第三十一一年八月號

35/4. 2. 6. 7. 8. 9. 10

36/5. 8. 9

教

第二卷第四號出づ

本誌執筆者

その堂々たる内容  
各方面の名家執筆

本多日生  
後藤新平  
床次竹二郎  
永井米藏  
岩野直英  
高島平三郎  
志賀重昂  
佐藤鐵太郎

毎月一日 十一日發行 一部金十錢

發行所 教發行所

東京府荏原郡品川町南品川四二二

(振替東京一〇九四〇番)

菩薩行に就て

「菩薩」といふのは天竺の言葉であつて、詳しくは菩薩と申すのを略して菩提と言つて居るのである。菩提と申すのは、菩提を求むる人といふことで、その菩提といふことは非常に意味が廣いのであるが、一つは上に無上の道を求むるの心、一つは下に衆生を救ふの心と申して、佛に成らうとする考と、一切衆生を救はうとする考の二つが總つて、それを菩提と申して居るのである。自分が佛に成らうとする考は有利心であつて、自分の幸福を求むるのであるけれども、佛教で言ふ自分が佛に成りたいといふ心の中には、その前に、大勢の人を救ひたいと考へるが、人間であつては思ふほどにやり切れない。先づ自由自在の力を得、限の生命を得て、思

本多日生現下著書

(現在品のみで、賣切りのものは注  
文されても餘計な手数で困ります)

本尊論	布装 一部金 七拾錢 送料 一部金 四拾錢
法華經要文	布装 一部金 五拾錢 送料 一部金 二拾錢
法華經の行者日蓮	一部金 十錢(送料共) 廿部金 一圓五十錢(送料共)
修法勸行の心得	一部金 十五錢(送料共) 十五部金 一圓(送料共)
教育勸語と思想問題	一部金 廿錢(送料共) 十部金 一圓(送料共)

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引御照會下さい。

本多日生

ふ存分衆生を救うて行きたいといふ濟度心の燃ゆる所よりして、自分も佛に成らうとする考が起つて来るのである。たゞ自分だけがうまい事をして、他の者はどうなつてもかまはぬ、自分だけは飛んで行つて雲の上昇るといふやうな、さういふ校い考から出發しては居ないのである。それ故に上に菩提を求むるの心、そのまゝ、衆生濟度の心である。衆生濟度の心を徹底して、思ふ存分に救ひ遂げようと思へば、今の儘ではいかぬ、途中で病氣に罹つたり、へこたれたり、まごついたり、死んだりするやうな人間であつては、人を救ふどころではない、どうかすると、自分が反對に救つて貰はなければならぬ、これではいかぬ。そこで濟度心

が燃ゆるが如く進んで行けば、自分が菩提を成就して佛に成らうとする心となるから、眞の濟度心の中には、上に菩提を求むるの心があり、眞の成佛の心には、下に衆生濟度の心がある譯である。であるから暫く上に佛に成らうとするの心、下に衆生を救はんとするの心と分るけれども、ごつちが一つでもいかに、兩方の意味合を含んで居ることを能く考へて置かなければならぬ。

佛敎の思想は非常に圓熟して居るので、一と萬と一つであるといふやうな思想が佛敎には能く出来上つて居る、それであるから約めて言へば、たゞ自分が佛に成りたいといふことで宜いのである。さう言つたからと言つて、「自分ばかり佛に成つてうまい事をしようと思ふのだらう、怪しからぬ……」そんな事は言はないでもわかつて居る。佛法を學ばないからお前はそんな事を言うのだ、俺が佛に成らうとする精神の内容を分拆して聽かさうか」といふこと

も、西洋の偉い學者は、どうしても將來は印度思想に依つて世界は救はれるであらう、仍ては大いに佛敎を研究しなければならぬといふ傾向を生じて來た。そこで西洋の學者がさう言ふものだから、日本の學者もいくらか眼が醒めかゝつて來て居る。成程さうであつたか、吾々は日本に居つて、左様な立派な東洋思想を有つて居りながら、少しもそれを尊ばずして、一も西洋、二も西洋と憧れたのは、大きにやり損ひであつた、明治以來數十年間の文化開發の努力は、半以上實は日本の文明を蠶毒して居つたものである、その功罪は相償はぬかも知れぬ、飛んだ事をしたと言つて、偉い學者は破の下から冷汗を流して居る、それが本當の偉い人間である。まだ偉い顔をして眺ね上つて居る者は、學者と言つて見たところが、それから見たらあかん輩であるといふ譯になる。

それは今申す菩提といふやうな言葉は即ちそれで

二  
になれば、非常に廣い意味の説明になるのである。これが即ち佛敎思想といふものである。

今や世界の思想はこの佛敎の思想に降伏せんとして居る。西洋の思想といふものは、何處までも小さくほせぐる思想である。一つのものは二つに割り、四つのは二つに割り、だん／＼小さくしてしまふ、一つの饅頭を幾つにも幾つにも割つて、しまひにはあんこやら皮やらわからぬ。「これがいつたい饅頭か」といふやうな風に、だん／＼物事を小さく／＼して行つた結果、そこに本當の事物がわからなくなつてしまつたのである。印度思想はこれに反して、大宇宙を一念の中に包む——一おもひの中に三千法界を具なへて居るといふやうなことを言ふので、この一と萬とを融即する大觀念といふものが今後起つて、現代の文明の悩みを救うのであるといふことは、今日世界の達識の士がチラホラ考へて來たことである。日本の方ではあまり考へて居る人が無いけれど

ある。菩提といふ一つの言葉だけでも實に能く裏も表も、酸いも甘いも調節されて居る。今日は學者と言つても、「學者は變な事を言ふものだぞ」といふのが通り相場になつて居る。又その學者にも各々分擔があつて、分れに分れたところの一隅々々の學問をして、それが博士といふやうなことになる。居るものだから、學者は甚だ危ふないといふことになつて來るのである。菩提といふやうな言葉は實に能く整頓した言葉で、たゞ一つの事を言ふて居るやうでも、その中に總ての事を忘れないやうにして行くといふ所謂圓妙の思想がある。圓滿にして曰く言ひ難い、これは／＼と言ふだけで、殆んど形容の出來ないやうな微妙な所がある。「これは／＼とばかり花の吉野山」と言ふ句のやうに、實に美事であつて、何とも言ひ表しやうが無い、ホーツと言つて驚く所に微妙な感歎といふものを東洋思想は大いに味つて居るのである。

それは東洋思想の一般の長所であり、殊に佛教がそれを代表して居るのであるが、さういふ事を考へて見るといふと、菩提といふ言葉も唯だ佛に成らうとするだけではない。人を救ふ心が伴つて居る、救ふといふことは又救ふだけではない、佛に成らうと考へることが伴つて居る。佛に成らうと思はないで、人を救はうなどと思つて居るのは調子が外れて居るのである。救はうと思つても途中でひつくり返るといふことを忘れて居るものである。人を救つてやると言つて連れて行き居る途中で、自分が轉んでしまふ、亭主が女房や子供を抱へて、俺が養つてやると言ひながら先にヒョククリ死んでしまつたりするやうなものである。そこでどうしても徹底的に人を救はうとするならば、自分が倒れぬだけの生命に達しなければならぬ。さういふ事を思惟分別して組立てられたものが佛教の大観念である。そこで菩薩といふのはさういふやうな意味である。

船に乗つて、麥酒を飲んだり、欠伸をしたりして居る中に、目的の港に着いてしまふやうなものぢや、それも船賃が澤山要るといふならば、それは考へるので、草鞋を履いて歩かなければならぬだらうけれども、それが無賃だといふことになつたならば、誰が草鞋を履いて山道をテカテカ歩く者があるか、斯ういふやうな事を言つて、變な譬喩見たいな事を以て煽てまくつたものである。さうすると一般の人間は無智な者であるから、無賃で船に乗れて御馳走も食はして呉れる、蒲團もある、寝て居る中に向ふの港にボンと着いてしまふ、さうして旅費が無ければ又小遣錢も懐ろに入れて呉れる、それはうまい話だ、サア行け……斯ういふ風なことになるのである。佛教の宣傳にちようござういふやうな態度を執つたものがあるが、それは宜しいか、宜しくないか、教の精神に合するか否か、この人生の文化に益ありや否やといふことを正確に研究すべき必要があるのでは

「行」といふのはその菩薩の資格を完うする爲に實行して行くべき事柄を申すのである。

その菩薩の事に就てお話をするといふことは非常に問題は廣いやうであるけれども、二つ三つの大事な點を捉へて述べやうと思ふ。

それはどういふ點かといふと、菩薩行は善い事であらうけれども、大分内容がむづかしさうだ、そんなむづかしい事をやらなくても、宗教といふものはやすい安心で人を救ひさへすれば宜いのだ、菩薩ナといふやうなむづかしい事を言はないで、凡夫の儘、罪の深い業つくばりその儘ボンと救ふといふ方が早いぢやないか。人間に菩薩に成れの、菩薩の行をしろのといふことは、難きを勤めるもので、そんな事が佛法の本意ではない、それは即ち難行道である。ちようござ遠い路を草鞋を履いて、山を越えたり、谷底を渡つたりして行くやうなもので、甚だ困難な事だ、唯だ信の一行に依つて救ふのは、大きな

ある。そこが菩薩行を否定してかゝると、菩薩行はやらなければならぬといふことゝ意見の岐れて来る所である。

モウ一つは極端に菩薩行といふものをむづかしく持かけて、モウ聽いたゞけでもびつくりするやうな事を最初から言つてしまふ、菩薩行といふものは布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧といふ六波羅密をやらなければならぬ、布施の行一つでもなかに容易なことではない。お前の眼の球を呉れと言はれたら、直ぐ自分の眼の球をくり抜いてやらなければならぬ、何の爲にするのだなどと聽いてはいかぬ、呉れと言つたらやつてしまへ、それをやつたところが向ふの奴がこんな様なものは要らぬと言つて、地面へ叩き附けて足で蹂躪つても、忍辱波羅密で腹を立て、はいかぬぞといふやうな事を言ふ。さうして菩薩行は容易に出来るものではないといふ威かしを喰はせ、且又左様な困難な事を貰いてやらなければ

ばなるまいかといふやうに考へる人がある。併しそれはやはり佛教の研究に於て足らざる所があるものだといふことを明かにしなければならぬ。菩薩行は大事なものである、さうして今日の吾々も實行可能のものである、爲さんとすれば爲し能ふものであるといふ點を明にすることが、菩薩行の問題に於ては極めて重要な點である。

然るに從來は濫りに菩薩行を否定する者と、又漫りにこれを高く見て行ひ難くするものとのみあつて、中正不偏の菩薩行——佛教の精神として實行可能の點を力説する者が極めて少ないのである。これが今日非常な禍ひを爲して居ることを認める。それ故に自分はこの菩薩行に關する中正不偏の點を御紹介しようと思はるのである。尙ほ最初にとゞ自分の勝手な意見でないといふことを證據立てる爲に、法華經の精神がどういふものであるかといふことを一言して置きたい。その大精神に基いて自分の主張の方針

名前を言ひ表はす場合に、詳しく言ふ時には、

「教菩薩法、佛所護念の妙法蓮華經」

と必ず言つてある。この法華經は菩薩を教へるところの法であつて、佛の護り給ふ教である、佛様が大切になさつて、さうしてこれを以て人を菩薩に仕上げるところの教であるといふことが、法華經の名前の上に附いて居る譯である。この教菩薩佛所護念の妙法華經といふのが本當の法華經の名前なのであるから、法華經を信じながら菩薩行を忘れたといふやうなことは、東京に居りながら東の字を忘れてしまつて「東京」とでも言つて居るやうなものである。法華經と言へばその上には「菩薩を教へるの法」とちやんと看板に書いて出してあるのである。その位大事な教菩薩法の法華經を持ちながら、珠數ばかりジャラ／＼言はして、菩薩行なんといふことはテンド頭から考へても見ないといふのは、あまりに間の抜けたやり方である。その點に於て永らくの間佛教

は進めて行くのである、唯だ自分が時代を觀察したとか、自分が勝手にさういふ意見を立てたとかいふのではない。根本は法華經の精神に導かれて居る譯なのである。

法華經は全く菩薩主義の教である。その事は開經たる無量義經に於て

「是の經は……菩薩所行の處に住す」

この法華經の教といふものは何處にとゞまつて居るかといふと、法華經を信奉する人が菩薩行をやるならば、そこに法華經がとゞまつて居る、菩薩行を選すれば法華經はそこには無い、消えてしまふといふことを言つて居る。さうすると法華經を信じこれを持つといふことに就ては、たゞ信じ持つのだといふ言うて居つても、菩薩行といふ觀念が無かつたならば、そこにはこの教はとゞまつて居ないものである。その事は無量義經の中に殊に大切な事として説かれて居るのである。又法華經の到る處にこの法華經の

の宣傳は正鵠を逸して居つたのである。偉い坊さんも澤山出たやうだけれども、併し偉くない坊さんの方が多い、それだから佛教の宣傳法式といふものがまるで教の精神にも背き、時代をも救ひ得ない無價値なものとなり來つたのである。これを本當にやつたならば實に今日は尊いものとなつて、その効果を現して居るべき筈である。又方便品には

「但教化菩薩」

といふ言葉がある。これはお釋迦様は一代の間何をなさつたかといふと、我はたゞ菩薩を教化せり、モウ初めからしまひまで人間を菩薩にしてやらうと思つて骨を折つて居つたので、小乗といふやうなそんな教は與へたことは無いと言つて斷つて居るからである。一切經も悉く人をして菩薩たらしむるが爲に説いたものである。佛教とは菩薩行である、斯ういふことが方便品に説かれて居るくらゐナンである。「但」といふ字は餘縁をからすと云つて、他のも

のを混せない、佛の仕事の目的はモウ全部菩薩をつくる爲に働いたものであるといふ意味で但といふ字が使つてある。唯但と言つて、この二つの文字はどちらも他のものを混へないといふ場合に使ふのである。

尙神力品には上行菩薩出現の場合のはたらしを説いて、

「如來の滅後に於て佛の所説の經の因縁及び次第を知りて義に隨つて實の如く説かん、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間に於て能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしめん」

と説かれた。末法の世の中に上行菩薩が出て来て、無量の菩薩を教へて結局一乘の教に來らしめるといふ、その無量の菩薩といふのは誰であるか。上行菩薩は即ち日蓮聖人となつて出られた。無量の菩薩とは小さく行へば日本人、廣く言へば全世界の人類が

斯ういふ意味から考へれば法華經主義は菩薩行獎勵の主義であるといふことは反對することは出来ない。彼の易修易行の淨土門一流と廉賣の競争をして、向ふが三錢と言へばこつちは二錢五厘、向ふが二錢にまければこつちは一錢に下げるといふやうな風に、佛敎の修行はたゞ廉賣の競争をすべき教ではないのである。大涅槃經の中にはこの事を面白く譬へられて居る、それは梅檀香木を賣りに行く人間が、毎日街を賣つて歩いたけれども、梅檀は尊いもので、僅かばかりでも相當の價がする爲に、二日三日賣り歩いたが少しも賣れない。途中で炭賣の男と道伴れになつた、炭賣の方は朝出がけに車に山のやうに積んだ炭を片端から賣つてしまつて、晝過ぎになつて歸る時には空車を挽いて歸る、毎日々々その通りに賣れる。その炭賣と二三日道伴れになつたものであるから非常に美しく思つて、「お前のは能く賣れるナ、車に一パイ積んで居るのが晝過ぎには空つぽになつ

無量の菩薩といふ言葉に表はれて居る譯である。それは人間を内面から見れば菩薩と言へるのである、發心せざる菩薩である。醉ばらひでも出來損ひの菩薩だけれども、併し覺醒れば本菩薩に成れるのである。今は醉ばらひ菩薩だけれども「やはり菩薩である。その事は不輕品といふ所にハツキリ出て居る、不輕菩薩といふのは人を見て輕しめない菩薩といふので、どんな人間に向つても必ず掌を合せて其の人を拜んだ、拜まれた者は人を馬鹿にするナト言つて怒つたけれども、不輕菩薩は馬鹿にするのではない、お前は今は醉ばらひ居つても、お前の心の中には佛性がある、何時かは覺醒めて菩薩行に入つて必ず佛に成る、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べきが故に我は汝を禮拜すと言つたのである。やはり醉ばらひでも覺醒れば菩薩道を行じて佛に成るといふことに依つて、不輕菩薩は禮拜の行を爲した。

てしまふ。俺の梅檀香木は三日賣り歩いたけれども、まだ一つも賣れない。俺もこれを炭にして賣つてやうか、さうしたら少しは賣れるだらう」といふので、その尊い香木をスツカリ焼いて炭にして賣りに行つた。ところが賣れることは直ぐ賣れたけれども、その賣上げは三錢にしかならなかつたといふ譬へが説いてある。成程梅檀香木も炭にすれば安くやつてしまふから賣れる、けれども教といふものは左様に價値を下して、尊い梅檀香木のやうな教を薪や炭と同じやうに引下げるといふことは、教を弘める者の最も注意すべき所だと、釋尊が涅槃の夕に遺訓せられたのである。たゞ安く賣る教が何も結構な譯ではない。それかといつて、又むづかしい事を言ひ過ぎて人をびつくりさせるやうなことをしてはいかぬ。教はその中正を得て、決して駈引があつてはならぬ。安く賣るの、高く賣るのといふやうな、ちようど焼芋を賣つたり柿や密柑を賣つたりするやうな譯のも

のではない。客に依つて三錢だと言つたり二錢だと言つたりするものではない。教といふものは國王大臣が買ひに来て、「二錢のものは二錢、乞食が買ひに来て二錢のものは二錢に賣るのである。教は對手に依つてその價值を高下すべきものではない。これは大事なことである。そのことを考へて、法華經が菩薩行主義であるといふことを徹底的に了解して行かなければならぬと思ふ。

併し法華經の内部には菩薩行のことがさう詳しく説いて無い。

『皮膚毛彩出でて衆典に在り』

と申して、法華經は大綱を論ずるもの、細かい事は他のお經にあつても、法華經の精神に合するものは採り用ひよといふのが佛敎の定則であるから、廣く一切經に亘つて菩薩行の研究を進めて見たら宜からうと思ふのである。自分は大藏經中の菩薩行に關する敎訓を仔細に攻究しつゝ、研究を進めて來て居るの

の時には男女を總括して諸君といふ言葉を用ひるやうなものである。このお經の表題も優婆塞といふ題で兩方をこめたものだと思ふ。であるから優婆塞戒經とは、佛法を信する男女の心得を説いた敎である。即ち佛敎信仰の通則、今日で言へば佛敎信仰の信條といふことである。今のやうに宗旨がいくつにも分れて、變な事を少しづつ言ふといふやうなことは根本に間違つて居る。佛法を信する者の全体に亘つて信奉すべき心得方といふものは共通して居なければならぬ。私は眞言宗だから不動さんへ行くとか、俺は禪宗だから秋葉權現へ詣るとか、そんな事が佛法信仰では決してない。不動でも秋葉でも、それは皆な婆羅門の神であつて、佛法の信仰の對象物ではない。佛法を信すると言へば、その定則に於て先づ三寶に歸依し云々といふ原則がある。その原則から外れてしまつたやうなものが宗旨などといふことはおこがましい。今私が申すやうに、佛法を信する限り

で、随つて菩薩行に關してはいろ／＼お話ししたい事が澤山あるけれども、なか／＼これを纏めて簡單に述べ盡すことは面倒であるから、先づ菩薩行に關する思想を最初に諸君の頭腦で整頓をして置いて、それから進んでさまざまのお經に關して批判を加へて見たいと思ふ。最初から澤山お經を列べて、あゝだ斯うだと言ふと、聴く方の頭腦がしつかりして居ないと混亂してしまふ。そこで先づその中心思想として菩薩行の事に關して説かれた優婆塞戒經といふお經の意味を一つ頭腦に入れて置いたら宜からうと思ふ。

優婆塞といふのは梵語で、譯すれば信者といふやうな意味である。優婆塞優婆夷と兩方挙げれば、信者の男と女といふことである。優婆塞と言へば男だけのやうに見えるけれども、これはちやうど演説をする時分に「諸君」と言ふやうなもので、女に對して諸君といふのは普通には使はないけれども、演説

は、何宗何派といふやうな小さな區別でなしに、大乘佛敎を信する者の原則を整頓したものがこの優婆塞戒經となつて現れて居るのである。

この經は七卷もあり、殆ど法華經と同じ程の容積を有つて居る堂々たるお經である。そうしてその文章と言ひ、内容と言ひ、實に能く整頓して居る。先づ佛法を信する者はこの經を一つ能く見て、それから又進んで法華經の善い所をズツと味ふやうにして行かなければならぬことになる。法華の方に頭を突込んで、鬼子母神様ぢや、帝釋様ぢやといふやうなことをやつては、佛敎信仰の原則といふものをまるで知らないことになる。この優婆塞戒經には、いきなり佛法を信する位の者は必ず菩薩行をやらねばならぬと言つてある、これが出發點である。それはさうあるべきもので、自分が佛に成らうといふ向上心と、人を救はうといふ大慈悲心を除いては、佛敎の信仰は成立たない、その大きな精神から出發した時、

始めて佛法といふ言葉がある譯である。兎角人間は「他人を放つて置いて自分だけ……」といふことになりたがるけれども、それでは信仰ではない、凡夫心である。又現在だけ善ければ死んだ先はかまはぬなどと思ふのも、未だ覺めざるの心である。

であるからこの經には一番最初に集會品第一といふのがあつて、大勢の人が集まつた時に、斯ういふ話が出た。「婆羅門の教では朝起きると六方禮拜と言つて、東西南北上下の六方を拜むことをやるが、佛の教では一般の信者が朝顔を洗つたならばどんな事をやるのであるか」といふ質問が出た時、釋尊は「それは菩薩行をやらなければならぬと考へよ。その菩薩行とは六波羅密である。彼は六方を拜するが、佛教では六波羅密を念頭より離さないやうにするのである」と説かれた。この六波羅密といふことは後に詳しく申すつもりであるから今は略して置くが、これが菩薩行に就て第一に問題になるのである。即ち

布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧といふ六つの事をむづかしく言ふのと否とで菩薩行に對する意見がいろいろ絡がらがつて來るのであるけれども、これは非常に大事なことで、これをあまり面倒に言はずに、實行の出來る程度に十分に消化して、佛法信者に實行を促すといふことが、今後の佛教復活の方法であると私は考へるのである。六波羅密の内容に入つては後に詳しくお話をして、あまり行き過ぎない所、本當の六波羅密の精神を明にしたいと考へて居るが、今はたゞ婆羅門の六方禮拜に對して、菩薩行として六波羅密を行ふのが佛教であると御答へになつたのである。

さうしてそれを實行しようといふ決心したものを菩薩と言ふのである。その菩薩に二通りある。一つは出家の菩薩、一つは在家の菩薩である。さうして殊に在家の菩薩を獎勵せられた。

「在家の人菩提心を發す、是れを乃ち名けて不である。その中に菩提の心を起すといふことはなかく、むづかしいから、在家の人が菩薩行に進まうと發心した時には、諸天善神が集まつて歡喜の舞を舞ふであらうといふことを釋尊は説かれた。これは在家菩薩を極力獎勵した言葉である。

可思議となす。」

と説かれて、在家の人が菩提心——前に申した佛に成らう、衆生を救はうといふ立派な考を有つといふことはなかく、尊いことである。何故在家の人が菩提心を起しにくいかと云へば、いろいろの事情にまとはれて居つて、一般生活の中には煩惱の多いもの

東京統一團本部教報

△六月五日、(午後一時開會)法要に次で「菩薩行に就て」本多總裁殿下の講演あり、來會者雨天の爲少なく八十餘名であつた、座談會は來客の爲に中止、△十三日(午後一時開會)「大道心」和實義見師、「受難の生活」感應長谷川義一師、「昭和の國民」日蓮主義「關田日城師、來會者七十餘名午後四時午教會、△十六日(午後一時午開會)地明會何會「女性觀の諸經の大要」本多會長殿下、來會

者七十餘名△十九日(午後一時開會)階上に於て法要「菩薩行餘論」本多總裁殿下、來會者百六十餘名、座談會なし△廿六日第三日曜は立正活映會社の加藤清正映畫鑑賞會で日曜講演休會日曜講演も本年は今月(七月)第二日曜から九月の第一日曜まで休會いたします。その替り八月一日から同七日まで一週間毎日夜七時より十時に至る三時づく佛教夏期講座

- を聞きませす、講師は左記在京の青年僧侶。
- 「善量品に現れたる佛陀の體用」 (二時間) 高木日晴師
- 「法華論」 (七時間) 長谷川義一師
- 「日蓮聖人宗教批判の基調」 (三時間) 秋山乾英師
- 「法華玄義に就て」 (五時間) 中野信真師
- 「講題(未定)」 (三時間) 土屋信玄師



# 信行の基調を説ける觀普賢經

(第十三回)

井村日威

三二、諸佛行者の爲に無相の法を説く

時諸世尊以<sub>レ</sub>大悲光明<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>於行者<sub>ニ</sub>説<sub>テ</sub>無相法<sub>ニ</sub>行者聞<sub>テ</sub>説<sub>テ</sub>第一義空<sub>ニ</sub>行者聞<sub>テ</sub>已心不<sub>レ</sub>驚怖<sub>ニ</sub>應<sub>テ</sub>時即入<sub>ニ</sub>菩薩正位<sub>ニ</sub>佛告<sub>テ</sub>阿難<sub>ニ</sub>如是行者名爲<sub>ニ</sub>懺悔<sub>ニ</sub>此懺悔者十方諸佛諸大菩薩所<sub>レ</sub>行懺悔法<sub>ニ</sub>。(五〇五、二)

上來説きたつた懺悔に關する問題の結論に入つたのである、懺悔の根本精神は前段に説いてある様に、我心身の實相を能く理解して、執着の心を捨てることである、それが出来れば懺悔の大目的に達したことであるが、それは諸法の實相即ち無相の極理を説

相を否定する處を無相と云はれたのである、凡夫の考へて居る様な差別的觀念を絶對に否認せられたものである、佛教は此根本原理より一切の問題に觸れて行くので、此原理を得ないでは佛教は分らないのである、此無相の極理が了解出来れば一切の煩惱も一切の苦惱も滅却するのである、懺悔の法と云ふも此根本から出ねばならぬ、六根の罪惡なるものは我他彼此の差別觀念が根本の無明と爲つて、我を愛し人を惡む様に爲り、一切の罪惡を犯すに至るものであるが故に、但其末節を懺悔しても根本に立入らねば時に跡戻りをする憂があるに依つて、今は其根本を説て再び此過惡を犯さざる様に、其最後に於て無相の法を説き給ふたものである、我等は此根本を把握することを努めねばならぬが、我等が欲望は常に此無相の理に反しつゝある行動を爲しつゝあることには大に反省せねばならぬ點であると思ふ、若し我等にして此無相の理に入ることを得ば直に菩薩の正位

ることに依つて其境界に達することが出来るのであるから、茲に最後のクサビとして佛は無相の法を行者の爲に説かるゝのである、無相の法とは開經無量義經説法品の中に詳しく説かれてある、「一切諸法は自ら本來今、性相空寂にして無大無小無生無滅非住非動不進不退、猶は虚空の如く二法あることなし」と説けるものこれで諸法の本体は生滅出沒なく、本來空寂虚空の如く平等一味の眞理であつて、我他彼此の差別の念を生ずべきものにあらすと云ふ、或特定の形を認めたり差別の相を見たりするのは諸法の實相を誤認したものである、一切の性一切の相を泯融して究竟して平等なりと見る處を諸法の實相を證つたと云ふのである、其平等一味の相を見て、差別

に入り得ることが出来るのである、第一義空と無相の法とは同じことである、三世十方の諸佛大菩薩の行じ給ひし懺悔の法は上來説きたつた懺悔の法であると結ばれた。

三三、此經は佛三種の身を生ず

佛告<sub>テ</sub>阿難<sub>ニ</sub>佛滅度後佛諸弟子若有<sub>レ</sub>懺悔惡不善業<sub>ニ</sub>但當<sub>ニ</sub>誦<sub>テ</sub>讀<sub>テ</sub>大乘經典<sub>ニ</sub>此方等經典<sub>ニ</sub>是諸佛眼<sub>ニ</sub>諸佛因<sub>ニ</sub>是得<sub>テ</sub>具<sub>ニ</sub>五眼<sub>ニ</sub>佛三種身<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>三方等<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>是大法印印<sub>ニ</sub>涅槃海<sub>ニ</sub>如此<sub>ニ</sub>海中能生<sub>ニ</sub>三種佛清淨身<sub>ニ</sub>此三種身人天福田應供中最<sub>ニ</sub>其有<sub>レ</sub>誦<sub>テ</sub>讀<sub>テ</sub>大乘方等經典<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>知<sub>テ</sub>此人具<sub>ニ</sub>佛功德<sub>ニ</sub>諸惡永滅<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>佛慧<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>。(五〇五、六)

此一段は此經に依つて懺悔を行するものゝ得る功

徳を説かれたもので、此大乘方等經典は本佛釋尊の證得せられたる一切のものを擧げて宣示顯説せられたものであることは、法華經如來神力品の明文である、今は其經を信するものに其證悟の凡てを譲り與へらるゝことを説き給ふためである、此經の中に佛の證悟を説き盡されてあるから、「此經は諸佛の眼なり」と説かれた、此經を信じ行するものは十界即ち宇宙の真相を能く理解することが出来るから「五眼を具することを得たり」と説き給ふた、五眼とは第一に肉眼、地獄界より人間界までの眼であつて壁一重向の見への凡眼である、第二に天眼、天上界の眼で、障壁を通して見得る力を有するもの、第三は慧眼で二乗が空理を證つて其證悟より一切を見る時の眼である、第四が法眼、菩薩俗諦を緣じて諸法を見る時の眼、第五が佛眼で佛陀の證悟の眼で十界の真相を其儘能く照さるゝ眼である、故に五眼を具すとは上は佛界より下は地獄界に至るまでの眼を具

すること、十界の全軀を能く理解したと云ふことである、次の文の「佛の三種の身は方等より生ず」とは佛の證悟や其力用を三種に分類して法身報身應身の三種に區別した、佛身の本軀を法身とし、其證悟の智慧を報身とし、其慈悲の方面を應身として一身を三方面より見たのである、此を三種の身と云ふた、要するに佛の證悟も力用も此經を信するに依つて得た功德であると云ふのである、「其大法印は涅槃海を印す」とは此大法印とは諸法實相の印である、普通には小乗教には諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印ありとし、大乘教に一實相印ありと言はれて居る、佛教と外道との差違は此法印が有るか無いかに依つて見分けよと佛が説かれた、法印とは世俗の印形と同じ意味で、小乗には此三の印、大乘には實相の印が無ければ佛説で無いと思へと説かれたのである、今茲に言ふ大法印とは實相の大法印である、此諸法實相の法門は大涅槃の證悟に導入するものな

れば涅槃海に印すと云ふのである、此大涅槃の證悟の中より佛の三種の身は出現したのである、此文に就て或人は本佛釋尊も實相の妙理を證悟つて成佛したお方であるから、本佛釋尊も實相の理の前には頭

文の次下の文に「當に知るべし、此人は佛の功德を具して諸惡永く滅して佛慧より生ずるなり」と説かれてあるのである、此文に依つても本佛に關する問題でないことは明了であらう。

三四、六根の滅惡生善を明す

爾時世尊而説偈言

若有二眼根惡 業障眼不淨 但當誦

大乘 思念第一義 是名下懺悔眼

盡諸不善業 (五〇六、四、五)

あるとは言はないのである、その無始實在の意味を了解せねば善量品は讀めないのである、今の經文は本佛の身の上的の事を言ふたのではなくして、本佛の説かれた大乘方等經典を讀誦した人々が、此經典に依つて五眼を具し三種の身を成就した事をお説になつたのであるから本佛の救済を受けた人々の事をお説に相成つた事と御承知ありたい、それ故に此經

此より下再び六根懺悔を略説して其滅惡生善を明かされるのである、其中に第一に眼根懺悔である、眼根の過罪深重にして業障の雲深く覆ふて清淨ならざるには大乘方等經典を讀誦して其義を思ひ其事を念じて、第一義空の無相の法を思念せよ、然らば即ち汝の業障頓に消滅して清淨の眼を得んと説かれ

たのである。此偈は前段の長行を重頌せられたものであるから前來申上た處と異つては居らぬ。

耳根聞亂聲、壞亂和合義、由是起狂心、猶如癡猿猴、但當誦大乘觀法空無相、永盡一切惡、天耳聞十方、

(五〇六、五)

耳根の懺悔である、痴なる猿の外面に接して狂態を演ずるが如く、我等も外界の音聲に迷惑して狂態を演じて遂に今日の迷界に墮落するに至れるを自覺し、大乘經典に依つて諸法實相を知り第一義空を了解せば一切の罪惡永く斷盡して清淨の耳根を得ることを得、天耳通を得て十方無礙の音聲を聞き得るに至るのである、法華經の法師功德品には六根清淨の狀態が委細に説かれてある。

鼻根著諸香、隨染起諸觸、如此狂惑鼻、隨染生諸塵、若誦大乘經

勤めて慈悲を行じ、諸法無相の眞寂の義を思ふて平等一味の眞實義に到達し得ば、口舌の禍茲に除却して清淨の舌根を得ることが出来るのである。

心根如猿猴、無有暫停時、若欲折伏者、當勤誦大乘、念佛大覺身

(五〇七、二)

長行の中にも心は猿猴に譬へられてあり、六窓一猿のお嘶を致したのであるが、我々の心根は始終ザワザワして暫くも靜思して居る時が無い、六根を通じて外界の事物に接觸し、あらゆる方面に囚はれて煩惱を起し、惡業の思に動せられて居るものである、今我等が現在の生活に満足し得ず向上せんと志ざすに就ては、先づ其意を折伏して覺醒せしめねばならぬ、それには佛を念すること、教を守り事を必とすること、此迄は但大乘經典を讀誦し實相を知ること計りであつたが、茲には佛を念することが説かれてある、此迄逆經を讀誦する場合には佛を禮し佛

觀法如實際、永離諸惡業、後世復不再生、

(五〇六、九)

鼻根の爲に香に著し、香を追ふて諸惡を作る、此狂惑の鼻の爲に六道を輪廻するの餘儀なきに至れるのである、今此を懺悔せんが爲に大乘方等經典を讀誦し、諸法の實相を觀すれば一切の著を遠離し解脱するが故に永く諸の惡業を棄捨し後生は惡處を受けず善處に生じ佛果を成就することを得んと云ふのである。

舌根起五種、惡口不善業、若欲自調順、應勤修慈悲、思法眞寂義、無諸分別思、

(五〇六、九)

口舌の聲は眼耳等に比して更に一層の罪惡を重ねて居る、妄語綺語兩舌誹謗惡口等の諸種の不善業を犯しつゝ、其罪業の爲に多劫の中に惡道に墮在しつゝあるものが我々である、今之を懺悔せんとして、

を念じた上の事であることは前來本經に通じて現はれて居ること殊更に改めて言ふまでも無い事であるが、茲には其事を一句搜入して「佛の大覺の身力無畏の所成を念すべし」と説かれたものである、茲丈で佛を念じ他の場合は佛を念するに及ばぬと考へては大なる誤である、殊に注意せねばならぬ。

身爲機關主、如塵隨風轉、六賊遊戲中、自在無罪礙、若欲滅此惡、永離諸塵勞、常處涅槃城、安樂心

憎怕、當誦大乘經、念諸菩薩母、無量勝方便、從思實相得、

(五〇七、三)

身根の懺悔である、身根は六根の依止處である、身根を依り處として六根が活動をして居るから六賊中に遊戯すと言ひ機關の主と言ふのである、若し我等苦惱の生活を離れて涅槃の城に入り當樂我淨の四德波羅密に満足せんと欲するならば前五根と同様に、大乘經を讀誦し諸法の實相を念じねばならぬと教

へられたのである、諸の菩薩の母とは諸法實相の事である、此偈頌の中に説かれてある、「第一義」「法の空無相」「法の如實際」「法の眞寂の義」「諸の菩薩の母」と言ふ言葉は異ふて居るが凡て諸法實相の妙理を指したもので、長行の中に「無相の法」と云ふも「第一義空」と言ふたも亦同様である、以上六根懺悔を再説したものである。

如此等六法 名爲六情根 一切業障海 皆從妄想生 若欲懺悔者 端坐思實相 衆罪如霜露 慧日能消除 是故應至心 懺悔六情根

(五〇七、六)

結文である、六根の罪惡は種々無量なるも、其根元は妄想である、如何なる妄想なるかと言へば、自己の本性たる諸法實相の一味平等の理を忘れて、少なる自我を作り、此少我に囚はれた處に其病根を發して居るのである、無量義經說法品に「然るに諸の

衆生虛妄に是は此是は彼是は得是は失と横計して不善の念を起し衆の惡業を造り六趣に輪廻し諸の苦毒を受けて無量億劫に自ら出ること能はず」と説けるは此である、虛妄に横計した處が根本と爲つて此苦の生活に陥たものである、此根本の迷を元品の無明と云ふのである、此元品の無明は實相の妙理に暗きより起つたものである、今我等の六根懺悔は此根本に立還つて元品の無明から取拂ふて掛らねばならぬから、「端坐して實相を思へ」と教へられた、實相を誤るから囚はれを生じ妄想を生ずるのであるが故に、能く其實相を見究めたならば一切妄想の雲は取拂はれて仕舞ふ、惠日の光明の能く霜露を除くが如くであると仰せられたものである、其根本さへ捉ふることが出来れば六根懺悔と云ふことはソソナに六ヶ敷いものでは無い、末節の一々をイヂリ廻して居つては面倒計りて其効果は擧がらない、今は其根本たる元品の無明を除き一擧にて迷夢を醒すべく教へられたものである。

## 統一團の回顧と自警

本 多 日 生

モウ一つは宇宙に關する事柄で、この廣き天地宇宙の實相といふものをどう観るかといふことである、これも面倒に言へばいろ／＼やかましい議論があるけれども、表面にあらはれて居るところの現象の世界と、その奥に潜んで居るところの本體の世界といふものを二分せずして考へたならば、恰も水と波のやうな關係に於て在るものである。恒久性の水を離れて波があるのではない、その恒久の水の上に波動が起つて居るのであるから、水そのものが恒久性のものであれば、波も亦これは恒久性なるものである。波だけに就て考へるから、起つては消える一時的のものと思ふけれども、波そのものは水ナンである、

水を離れて波があるものではない。それと同じやうに、現象の世界は一時おこり、一時消えるやうに見えるけれども、これは實在世界の波動であるから、現象その儘實在のものであるといふので、現象實在論を法華經はハッキリと説いたのである。即ち法華經以前の經々に於ては世間の相は無常なりと教へて來たのを、法華經に至つて方便品に於て「世間相常住」と説いて、人生のその日／＼に現れて來るつまらない事のやうに思はれたことにも、それ／＼深い意味がある、一時の現象のやうに見えるその事柄に、みな深遠の意味を有つてそこに味ひが現はれて來るものであると説かれた。即ち人生の表面の無常とそ

の奥に在る本体の永遠と、その永遠の本體と無常の人生とを結んでそこに人生觀といふものを打立て、非常に微妙な意味に説かれて居る。是れ以上の思想といふものは人類の世界に現はれて來る譯がない、だから昔からナンボやつて見ても、行つたり戻つたりして結果はそこへ戻つて來るのである。それでなければ人間が毎日飯を食つたり、豆腐がうまい、じやが薯がうまいといふことは言へない譯である。人生の無常が無常の儘であつたならば、じやが薯を食ひながら涙が出て來なければならぬ、又そんな事も考へないでボンやりして、じやが薯がうまい、豆腐がうまいと言ひ居つたならば、人生の終に達してワーンと泣き出すやうな事にならなければならぬ。それを一々現象にあらはれたる無常の世界と本體の永遠の世界を調節し來つて、さうして一時々々の現象の上にも永遠の味ひを感じつゝ、人生を送つて、さうしてその終りは不滅の生命に續いて行くことが出來

るといふのであるから、法華經の思想くらゐ完全に、工合よく此の宇宙の實相を示したものはない。それが眞實の教といふことになるのである、それは否も應もあつたものではない、反對するもしないもない、此の點から考へたならば、法華經を信じないといふ事は出來得ないことである。法華經の教をよく解れば、自分自身の本体に取つても洵に工合の好いことであり、世間の實相を考へる上にも一番完全圓滿な所を教へて居るのであるから、何人と雖も信せざるを得ぬものである。然るにそれまでに至らぬのは其の人間がウツカリして居つて、自分の事もわからず世間の事もわからず、唯だ夢を見てフラ／＼して死んで行くといふやうな輩ナンである、人間に生れて年齢ばかり四十にもなり五十にもなつたけれども、思想精神の上には於てはまだ眼も明いて居らぬ、ちやうど二十日鼠の生れたばかりのやうなもので、眼もあけないでクロ／＼して居る、あれと同じやうなも

のである。人間は佛の教に來つて初めて人生といふものを眞に領解し得るのである、他の學問はどれ位精しくとも、社會上の地位がどれ位えらくなつても、人生觀の點に於ては二十日鼠の赤ん坊と同じものである。であるから佛敎といふものゝ特に有難い意味がそこに在るのである。

に見えない世界に於ても、三世を貫いて何時でもその通りの事が行はれて居るのであるといふことを、明に御示しになつたのである。斯くして法華經には眞の自己と、宇宙と、佛陀とに關して、その眞實を説いたのである。さうして一切經といつても、此の三つの事より外に用事はないのである、七千餘卷の澤山の經々となつたからといつても、此の三つの點を除つてしまつたならば、餘は部分的のものであつて何にも用を成さないものである。その事も、常に佛敎だけに就て言ふのではない、廣く宗教の全体を考へるといふと、宗教の本質といふものは即ち自己と、宇宙と、超人と、この三つであるといふことの原則がチャンと決定つて居る。素人がそれ以外に澤山いろ／＼あるやうに思ふのである。ちやうど國家といふものが領土と人民と主權といふ三つで説明されるが如きものである、素人は國家といつたならば、いろ／＼な物を持ち出して、風

モウ一つは佛樣のことに就てであるが、この廣い天地の間には、自分の生命も永遠であるが、その生命と共に永遠に存在して居る尊い方がある。ちやうど吾々は三月月の如きものである、之れに對して十五夜の満月のやうな、永遠の靈魂の全分が光り輝いて居る方が在るといふことを説いて、そこに本佛といふものを明したのである。その本佛の現動として釋迦牟尼は人生に出現して、吾等衆生を導いて呉れて居るのである。さうして此の本佛の活動は單に娑婆世界だけに限るものではない、今吾等の前に立つて優しい考で導いて下さつて居る事柄は、吾々の眼

に於ても、三世を貫いて何時でもその通りの事が行はれて居るのであるといふことを、明に御示しになつたのである。斯くして法華經には眞の自己と、宇宙と、佛陀とに關して、その眞實を説いたのである。さうして一切經といつても、此の三つの事より外に用事はないのである、七千餘卷の澤山の經々となつたからといつても、此の三つの點を除つてしまつたならば、餘は部分的のものであつて何にも用を成さないものである。その事も、常に佛敎だけに就て言ふのではない、廣く宗教の全体を考へるといふと、宗教の本質といふものは即ち自己と、宇宙と、超人と、この三つであるといふことの原則がチャンと決定つて居る。素人がそれ以外に澤山いろ／＼あるやうに思ふのである。ちやうど國家といふものが領土と人民と主權といふ三つで説明されるが如きものである、素人は國家といつたならば、いろ／＼な物を持ち出して、風

呂屋が出て來たり、電車が出て來たりするから、説明が要領を得なくなつてしまふ。法則に當はめて説明すれば、國家とは即ち領土あり、人民あり、主權あり、この三つが揃ひさへしたならば國家を成すのである。それと同じやうに、宗教に於ても宇宙觀といふものが國家の領土にあたり、個人の本体といふのが人民にあたり、本佛といふのが主權にあつて居るので、宗教を説明する場合にも、この宇宙觀と人身觀と佛陀觀の三つで事が揃ふのである。それが完全に説明されて居る教、立派な教といふことにならぬ。國家でいへば今の三つの要素が理想的に揃つて居る國家が、立派な國家と言はれる譯である。

さういふ譯であるから法華經の眞實の教といふことは、他の教に對して喧嘩腰で言ふのでもナンでもない、他の教は部分的の説明がしてある、法華經はそれを纏めて統一して居る、その意味合を徹底して行けば決して喧嘩になりつこはない。どのお経でも

も入れられる、握り飯も入れられるといふ譯である。ちやうどさういふ工合に一切經といふものを重ね箱のやうに纏めれば、法華經といふ一番大きな箱の内にゴツ／＼と入つてしまふ。今度引き出して澤庵を入れようと思へば幾つにもなつて出て來るものである、斯ういふ風に佛敎全体を觀たものが法華經ナンである。法華經はさういふ風に全体を一つに纏めて居る、他の經々は一つ／＼違つた小さな箱のやうなもので、而もその中の一つ／＼が、これが一番良いと言ひ出した、ちやうど火事見舞の御馳走を貰つた、この内には卵焼が入つて居るからこれが一番良い、「イヤ此方の方は握り飯が入つて居る、卵焼などは腹の足しにならぬ、握り飯が一番良い」と言つて喧嘩を始めたやうな事が佛敎の各宗の争ひである、「そんな事はやめたら宜からう」といふのが法華經の立場であり、日蓮の主張である。そんな部分々々の喧嘩はやめて、モット全体的に佛敎を領解しなければ

どの宗旨でも、言ひ居る事はその部分々々の説明にしてそれが完成されて居らない、法華經は一切經中に説いてある思想の全体を纏めてそれを完成したものである。だから譬へて見れば、私等の郷里ではきりこといふが、一種の重ね箱といふものがある、重ね箱とは違ふので、細長い形でモットツツと大きな木で造つた容器で、春慶塗のやうに仕上げてあつて、それが幾つも／＼だん／＼内が重つて居る。火事であつた見舞でもやる時分に、握り飯を拵へたり煮べを拵へたりして持つて行くときには、それを順々に内から引出せば幾つにもなる、藏つてある時には一つの箱に納つて居るが、引出せば五つにも六つにもなる。重ね箱の方は同じ大きな箱が重ねてあるから、内に物を入れた時も空つばの時も同じ容積を持つて居るけれども、その重ね箱の方は、藏つて置く時には一番大きな箱一つの容積に納まつてしまふ、入用な時には引き出して、幾つにもなるから、澤庵

ならぬではないか。斯ういふ主張に居るのである。同じ争ひでも、分裂の争ひと統一の争ひといふものを能く考へなければならぬ、同じ家の内で喧嘩をして、嫁と姑、下女と婆さんといふやうな工合に、唯だ喧嘩をするが爲に言ひ争ひをする、それは銘々勝手な事を言ふから、やればやる程だん／＼家庭の内が面倒になる。そこへ「そんな喧嘩はやめてしまへ」と言つて親父が出て來る、「どつちが善いも悪いもない、みんな廢めろ、その代り晩には鮎を御馳走するから、それを食つて仲好くしろ、それでも喧嘩をやめないと言ふならみんな出て行け」といふ大きな喧嘩が始まる。「出て行かなければ俺は此の家を疊んで他所へ行つてしまふから、お前等勝手に喧嘩をして居れ」といふことになる。その親父の言ふ事は劇しいやうだけれども、それは實際その家の平和を思ひ、根本の改革を思ふ上から起るのである。そのやうな意味に於て、日蓮聖人が各宗に對して攻撃的

の言葉を吐かれたことは、一番喧嘩が大きいやうに見えるけれども、それは喧嘩の爲ではなかつたといふことを了解しなければならぬ。さういふ事が簡単に「統一」といふ一言でわかつて居るのである、即ち日蓮は内に佛教の統一を主張したものであるといふ言葉で、その意味が盡されるのである。

斯様にして法華經に於ては、先づ教の統一に就いて、その説明が如何にもよく統一されて居るといふことが證明されるのである。

モウ一つ佛教の統一に對して大切なことは佛の統一といふことであるが、これは既に今の教の統一の中に十分説明されて居ることで、即ちそれは釋迦牟尼を中心にして一切の佛を統一したものであることは、洵に明瞭なことである。

此の、内に於て佛教を統一するといふことは非常に必要な事である。然るに今日、日蓮宗内部に於てすら唯だ小さな喧嘩から喧嘩へ移つて行くといふ

のではない、さうして日蓮聖人のなさつた通りにさへ行けば宜しい、日興門派であるとか、日向門派であるとか、さういふ弟子の流れを趁ふ必要はない、根本に歸つて日蓮聖人の通りにしなへすれば分裂の理由は無いといふことを主張したのである。洵にその考が正當であると思ふ。その點に於て今日も日蓮門下は未だ覺醒するものである。我が統一團の如きは曾て日蓮門下の統合をも策して、非常な勢を以ていろ／＼畫策をしたので、爲し得べき程度の事は悉く爲し了つたのである。近頃も日蓮門下の分裂を嘆いていろ／＼動いて居る人があるけれども、それ等の人の動き方より百倍二百倍の努力と熱誠とを以て爲すべき事は皆爲し畢つたのであるけれども、覺醒めざる者多くして終にその儘になつて居るのである。吾々の努力が足らぬのではない、吾々の努力は爲し能ふ限り爲し畢つたが、見切をつけて今は諦めて居るだけのことである。それはやはり今申す統

傾がある。僅かな事柄から分派をして日蓮門下が入つ九つに分れ、又その派内にもいろ／＼の異論が起つて居るのであるから、その議論葛藤を數へ立てれば様々に分裂をして居るが、それは學者の閑事業で、つまらぬ事である。今日から研究をして見ても、その分派理由といふものは甚だ透明を缺いて居る、一も首肯さるべき理由は無い、認容さるべき理由が無い。それから顯本法華派も分派したではないかと言はれるかも知れぬが、これは大体分派はいけなしいといふ主張に基いて居るのである、日蓮聖人が各宗の分裂を否定したと同じで、顯本法華宗の團祖日什上人は、日蓮門下の分派を否定したのである、それは日什上人の主張、その經歷に於て頗る明瞭である。上人はハツキリ其の事を申して居る、日蓮門下の分派は既に日蓮聖人の六門跡から始まつて分れて居つたのであるが、六門跡ともあるべきものは、日蓮聖人がお認めになつた以上は決して異論のあるべきも

一運動の一種であつて、先づ日蓮門下の統一を畫さなければならぬ。

佛教各宗に對する所の統一運動としても、唯だ法華經の内部からのみこれを主張したのでは彼等が承服しないから、一切經の上から此の法華經の精神を發揚しなければならぬといふので、不肖ながら大藏經要義を統一團に於て講じたのである。當時統一團に於て經を講ずる事は實にさかんなものであつたので、法華經の如きも前後幾回これを繰返して講じたかわからぬ、日蓮聖人の御遺文の全体も講じ了つて、更に「聖訓要義」とし「聖訓摘要」としてその要文を講じ、遺文の研究に於ても自分としては遺憾なきものであると考へて居る。そこで法華經の研究に於ても遺文の研究に於ても結了を告げたものとして、手を伸して一切經の上に及んだのである。その當時の事は如何にも勇ましいことであつたので、丁度岩野直英氏が自宅に法要を営まれたことがあつて、當時

の幹部の者が寄り合つた、それから紅葉館に招かれて、その席上此の問題を提起して、モウ法華經の講義を繰返してやつたし、遺文の講義も済んだし、是からやれば一切經に手を擴げなければならぬが、それには天台大師でも頼んで來なければならぬ、併し天台は既に死して居ない、自分でやるとしてもナカ／＼骨が折れるし、ごういふ工合にやつたものかといふ相談をしたのである。それは大分眞面目な問題であつて、末法末代には異常なる現象であつた、場所が紅葉館であり、御馳走を食べながら、大藏經講すべきかといふ問題を攻究したので、今から考へても如何にも勇ましい事であつた。それは自分が奮發してやつて見ても宜いけれどもナカ／＼骨の折れる事であるし、力の及ばぬことであるから、思ひ悩む次第であるといふことを附加へて申した。所が其席に居られた矢野茂氏や山田三良氏佐藤鐵太郎氏宮岡直記氏小原正恒氏松本有信氏その他の名士も熱心に

盡力されて同志を集めた結果、大藏經を講じて貰ふことにしようといふ事になつた。それではといふので大藏經の要文を講ずることになつて、只今「大藏經要義」として出版されて居る巻一、巻二あたりは、統一閣で講義をした方が先で、講義が了つてから出版をしたのであるが、後には出版の方が速度を増して二ヶ月に一巻づつ出版したから、講義の方はなかに二ヶ月に一巻分は進まない、巻四、巻五となる」と書物の方に先を越されて、講義を聴く方もタチダヂとしたやうな事であつたが、それはやはり統一閣の事業であつた。統一閣は唯だ外部に對して形の上の働きをするといふことが、この團結の一番大事なことでない、極く地味な、人に知れない、さういふ思想の内的研究に對して一つの基準を發見し、光明を與へて、後來その方針に進む者の爲に道開きを爲し得たならば、統一閣の責任は畢つたと謂つて可いのである。であるから法華經の解釋でも遺文

の講義でも、その他一般の講演、講話の場合に於ても、いつも其の抱負と方針といふものはそこに閃いて居ることを、諸君は認め得るであらうと思ふ。唯

だボンヤリ月並な、宜い加減な事を言つて居るのではない、僅かな話の末にもその方針と抱負とは閃いて居ると思ふのである。

各地教信

神戸教報

六月十二日午後一時から千

名、非常な盛式で午後十時終了した。

京都布教報告

六月一日 日本山婦人會

供會を開催、市社會部河部氏の童話「孝行な健ちゃん」岩崎氏の童話「十五夜お月様」東川崎校大竹氏の童話「鬼の面」等あつて聴衆を喜ばせた。委會者百名餘、尙爾後毎月一回第一日曜に千供會を開會する旨發表した。右終つて月例修法説教があつた「千供會開催を機として無井師 △廿二日午後三時から神戸高等商業學校で本多親下の「日蓮聖人の人格」と題する講演があり引續き同午後七時半から立正寺で大講演會を開く「日蓮聖人の慈訓」本多親下、聴衆約二百五十

「法話」百塚進齋師△二日護正會「法華經講義」原田本部長△七日修學院村信徒中島ふさ方通俗講演會、山田繁次郎氏の統一節、諸苦所因「原田部長△六日青年會細野長雄中島孝治兩氏講演△八日成就院婦人會「苦樂の世相」原田部長△九日正行院婦人會「調和主義」原田部長△八日夜「人の光」墨田芝師「民富論」金光孝碩師△十三日本山婦人會「法話」萩原日光師△十八日監督布教本山にて「遺囑の恩恵」京藤義應師「七寶莊嚴の身」能仁監督布教師△十九日寂光寺にて「如來共賞」京藤義應師「法華經信

心の血脈」能仁監督布教師 △廿日晝「法華經要文講義」本多親下。夜「佛教と菩薩行（其二）」本多親下の講演 △廿八日本山婦人會法話金光孝碩師。  
大阪教報 六月三日堂開寺にて「不動心土持師性論」有田師「思無窮」金光師△八日蓮成寺「報恩に就て」京藤師△十一日「法華の二大信條」能仁監督布教師「宗論の概要」道法尊重「有田布教師△十二日堂開寺にて「社會の福祉と六問題」有田布教師「法華信心の血脈」能仁監督布教師 △廿一日婦人會「立正大師の慈訓」本多親下△全夜大紙俱樂部にて「菩薩行と日蓮聖人」本多親下 △二十二日堂開寺にて「本佛の慈光」石井氏「信心に就て」和井田氏△二十五日徳永宅にて「信仰の力」京藤師。何れも頗る盛會多々の効果を奏せり。



# 肺結核治療の秘訣 (第二回)

名古屋更生醫院 醫學博士 奥田史郎

## 人工氣胸療法の話

人工氣胸療法の偉力 余は第一回總論に於て、肺結核に對しては時期病型の如何を拘はず一律不偏的に作用する藥劑は無いにしても相當有力な療法がないでもない、即ち或病型の患者に限り有力に働く療法がある事を述べた。人工氣胸の如きは恰もその好例の一つである。

抑も肺結核が未だ初期の間は在外に治療し易いものである。然し病勢が進行して高熱、咯血、多量の喀痰、咳嗽等進行性破壊性症狀が仲々消退しない様な患者にあつては從來の肺結核療法のみでは結局

救治する事が出来ないものである。斯の如き場合從來は唯、對症的に藥物を以て患者の苦痛を軽減するのみで、醫家は殆ど此不幸者の死を待つの外致し方が無かつた。然るに最近人工氣胸療法が發達して、斯かる不幸な患者の一半を救助し得るに至つた。其恩恵の至大なる意義に於て、實に各種醫療處置中之に比較すべきものを見ない。今や歐米に於ては盛に臨床家により施術せられ又本邦に於ても漸次その聲價を高めんとして居るのも當然の事に外ならない。

由來 人工氣胸療法の根柢は他の疾病の場合と同様に患部の安靜が自然治療力を催進せしめる事にある。自然例を見るに、偏側の慢性肺結核は肋膜炎に

滲出液の長時貯溜する事により或は特發氣胸によつて患肺が壓扁せられて縮小の状態に長く止る時には異常の好影響をもたらすものである。又他のアナロギーによるに、例へば急性胃腸加太兒の時、絶食によつて胃腸の安靜を計ると容易に自然に治癒して了ふが、反之尙過食を續けると病は益々惡化するのみである。又外傷の場合も同様で患部の安靜は自然治癒を強大ならしめるものである。反之患部を安靜に保たないなら容易に治療に赴かないものである。他の好例は結核性關節炎の治療であるが、ギプス繃帯で患部の安靜を保たしめると是だけでよく治癒に向ふのである。肺結核も同様で病肺が安靜を得れば良好の経過をとる事は明確な事實である。然し乍ら從來、患肺に任意に安靜を與へる事は不可能であつた。之に向つて第一研究に着手したのがカル

ソんで西紀一八二一年彼は肋膜炎を開いて人工的に肺を縮少せしめ肺癆を治愈せしめた。一八三三年ラ

マクデ氏は此見解に賛同し研鑽を進めた。一八八二年伊醫フオラニニ氏が臨床的に之を應用し且學理的講究を行つて以來今日の盛況を見るに至つたのである。

原理及效果 肺組織は肋膜炎が陰壓であるので膨脹の状態にあるが若し胸腔に氣体を入れて陽壓にするると肺は肺門に向つて萎縮するものである。フオラニニ氏は外科手術を行ふ事なしに特別の套管針を以て肋膜炎内に消毒された氣体を送入して人工氣胸を完成する事を發見した。現今では之を改良した方法を應用して居る。施術は至つて簡單で熟練せる醫師によれば何等の危険を見ないものである。氣体が肋膜炎内に十分に送入されると患肺は縮小して静止の状態になり、呼吸運動を停止する。而て病竈の自癒機能は之によつて非常に催進せしめられるものである。然し送入された氣体は一定時日を経過すると漸次吸收されて了ふから再三補充送氣を行はねばな

らぬ。始めは数日の間隔、次第に一週、二週、三週と其間隔を延長して遂には月一回の送氣にても足る様になる。勿論此間一般の養生法を守る事は必要であるが重症でない人は氣胸完成後(數回送氣後)は外来診療で十分で獨逸などでは勞働に従事し乍ら送氣を受けて居る者さへ尠くない様である。

人工氣胸が送氣によつて完成すると患肺は萎縮安定し静止の状態即ち呼吸による肺の擴大收縮運動を停止せしめ、血流及淋巴液は沈静し、淋巴液を停滞せしめ此部の毒素の循環を阻止せしめ全身の比較的免毒を誘致する。局部では毒素の蓄積により病竈に結締織増殖及硬化が催進せられ結核菌の散慢が防止される。又壓迫のため分泌は減少せられ其崩潰物質たる喀痰も減少する。是等によつて自覺症状は著しく輕快し發熱盜汗去り食欲亢進し榮養は恢復し喀痰中の結核菌は消失するに至る。此際他側の健肺は何等惡影響を蒙らないのみか時には小結核病

竈等ある時之が治癒する事も稀らしくない。

適應及成績 前述の如く人工氣胸療法は非常に卓越した治癒作用がある。然し如何なる肺患者にも行ひ得ると云ふわけにはいかない。只或一部の患者にしか應用し得ないのは誠に惜しい次第である。此療法を行ひ得ない患者は、兩肺が結核に犯されて居るもの、肋膜炎に肥厚癒着のあるもの、心臟病及腎臟病の併發せるもの等である。又丁度此療法を施行してよいものは、一側のみの肺結核で、他側の肺は健全であるか又は病度極めて輕微のもので、肋膜炎癒着の無い患者に限る。肋膜炎に癒着があると、肋膜腔に送氣が出来ない。従つて完全な氣胸が出来ないからである。又兩側の肺が犯されて居ると、一方の患肺が萎縮して安靜を保つ間、他方の患肺の負擔が重くなつて結果が惡いからである。而して又輕症の偏側肺結核では、人工氣胸療法によらないで、他の療法でいくらかも治癒し得られるから、使用する事が尠

ない。兎に角本療法は難治の肺結核に對して、確實な作用があるから將來は一層改良され普及される事と信ずる。

一般に氣胸療法を開始すると一ヶ年又は二ヶ年程の間は月に一、二回の送氣を實行する必要がある。但し病症の輕い人は入院を要しない。又其間職務

に就く事さへ可能の事が多いのである。治癒率は非常によくて、片側重症の人ばかりでも統計で約三分の二程は全治するものと報告されて居る。要するに一般的には應用されないが、有力な治療法である事には異論はない様である。

## 各地教信

### 京都通信

六月八日日本正寺二樂會「人の道」墨田支師「皇恩無窮」金光會長△日本正寺人會「恐怖の心を去れ」金光孝碩師△廿八日本山開山會「婦人覺醒の秋」金光碩師△七月二日本山青年會「青年の欲求する宗教」金光孝碩師△日本正寺二樂會「家庭教團を法華經に求めよ」金光會長「世相と日蓮主義」細野陸軍少將。餘興として米田旭風先生の「大高源吾の眞實経ありて盛會なり」。△七月十日日本正寺人會「稱道文要義に就て」金光孝碩師。

### 四日市教報

六月廿三日北勢に於ける宣教の根據地四日市の安樂寺に於て大信正本多日生理下の大講演會あり同日五時より東洋紡富田工場に工場布教を終られ八時より現下は「日蓮聖人の慈訓」を題して二時間に亘り獅子吼せられたり聽衆五百名を算し遠く數里の近在より参詣する者多數あり近く國友日笠齋正によりて創設さるべき追分村の教會所の募集を要する誠宜なるかな。

### 金澤教報

金澤教壇に於ける六月中に於ける信仰運動史左の如し△說教會八日夜釜

屋本成寺にて「毎自作是念」芝沼謙城師「信仰の華開けなほ」能仁一十師△地明會秩島町立正寺に於ては地明會を組織し毎月十日二十日の二回公會講演を開催することせり、十日其發會式を擧ぐ。「發會の辭」杉田常政師「佛敎經典の大義」能仁一十師「宗教信仰の社會的意義」芝沼謙城師△常樂會十五日日本覺寺にて「日辨上人」芝野順吾氏「日蓮主義の輪廓」芝沼謙城師△地明會二十日立正寺にて「日蓮上人一代記」杉田常政師「佛敎經典の大義」能仁一十師△日蓮主義講演會廿六日本長寺に開く

「開會の趣旨」杉田常政師「健全なる信仰の其實例」能仁一十師「日蓮主義より觀たる朝鮮支那の佛敎及政治及善護行」野口日主現下。

# 聖訓摘要

本多日生

それから又

肇公の翻經の記に云く、大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什を頂き摩で、云く、佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす、此の經典東北に縁有り、汝慎んで傳弘せよ云々。予れ此の記文を拜見して兩眼滿の如く、一身悦を偏くす、此の經典東地に縁有り云々。西天の月支國は未申の方、東方の日本國は丑寅の方也。天竺に於て東北に縁有りとは豈日本國にあらず哉。(遺文錄)

これは今日も残つて居る實に不思議な事でありますが、肇公の「翻經の記」といふのは、僧肇といふ人が羅什三藏の大勢のお弟子の中の秀才で、先づ二番目位の所に居られたえらい坊さんである。法華經の翻譯に羅什三藏と共に從事をした人でありますが、之れを肇公といふ。その翻經の記といふのは法華經の翻譯が済んだ時に、その終りに跋文のやうにして、羅什三藏が斯ういふ事を書いて置けといふ命を受けて、肇公が筆を執つて書いたものである。それは世俗に行はれて居る法華經には抜いてあるけれども、大藏經の中に於て法華經の終りにはちやんと附いて居る、それを除つたのは世俗に略したのであつて、この跋文は最初法華經の翻譯が出来上つた時から付いて居る、それは附けて置く方が本當である。その中には羅什三藏がお母さんと一緒に天竺に行つて、須梨耶蘇摩三藏といふ高僧から法華經の原本を買はれた、その原

本は天親菩薩が天竺にある澤山の法華經を寄せ集めて、間違ひのないやうにせられた、天親菩薩の是正したる法華經である、これが一番正しい、當時印度にあつて法華法の中にも、段々寫して行き居るのであるから、少しづつ、の違ひはあるけれども、これはモウ一字一點も間違はない一番完全な天親菩薩より傳はつたものである。それを須梨耶蘇摩三藏が左の手に法華經を持ち、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて、この天竺に於て一番正しい尊い法華經の原本を汝にやる、お前は慎んで之れを弘めなければならぬが、この法華經はどういふものか縁が東北にある、天竺から東北の方に當つて法華經は弘まるといふことを古來言ひ傳へて居る、それは彌勒菩薩が生れるといふこともあり、いろ／＼のことがありますが、その話は今は略して、兎に角須梨耶蘇摩三藏がさう言はれた。そこで羅什三藏はその命を受けて、どうしても之れを東北に傳へなければならぬといふので、天竺から今の新疆省の砂漠の向ふの所を通つて支那の方にやつて來やうとした、その途中で龜慈國といふ國に暫く滞在をして居りました、そこが自分のお母さんの國でありましたから、其處に居る内に戦争が起つて、中々支那の方に來られなくなつた。暇がかゝるものであるから支那の王様が、羅什三藏が支那に來るといふ話を聞いて、呂公といふ將軍に軍隊六萬人を附けて、さうして邪魔する者は逐ひのけて羅什三藏を迎へて來いと云ふた。それから羅什三藏が呂公と一緒に來るのでありますが、又その間にいろ／＼の事變があつて、とう／＼長安の都に來る迄には十九年もかゝつた。さうして長安の都に來て逍遙園といふ立派な御殿の中に法華經の翻譯館を置いて、其處で翻譯することになつた。これに参加する者は當時の學者八百人といふ大勢の人が携はつて翻譯をする、天皇は毎日臨御してその事業を御覽になつたのであります。それが出来上つた時に今の事が書いてある、この「縁東北に有

り」といふことに依つて、羅什は茲に法華經の翻譯を完成した、實に悦びに堪えんことであるといふ事を書いてあるのを日蓮聖人が見て、縁東北に有りといふのは、天竺から考へるといふと、丁度天竺は日本の方から見て未申の方に當つて居る、天竺から見れば日本は丑寅の方に當つて居るのであるから、縁東北に有りといふことは日本を指したものであらう。さうしてその事を考へれば「兩眼龍の如く一身悦びを徧くす」と言はれた、これはどういふ譯であるか、詰り涙が龍のやうに出るといふ、形容詞も中々大きい。白髮三千丈といふことはいふけれども、兩眼龍の如くハラ／＼と喜悅の涙を流された、こゝに日蓮聖人の精神が現はれて居る。それは日本の國は日蓮聖人に取つては一番大事な國である、どうぞしてこの國を立派に榮えさして行かなければならぬ、併ながら國の榮えて行く根本には善き法がなければならぬ、今日の言葉にしていへば最高の文化を持たなければいかん、國民を高き道德に導き、清き信仰に導き、高尚なる理想に導き、あらゆる文化發展に必要な力備を備へしめて、最も優秀なる民族として世界に進み行かなければならぬ。それは皆教の力に求めなければならぬが、その「一番善き教だ」と日蓮の説んだ一切經中最爲第一の法華經が「此の經典は縁東北に有り」といふ事を、羅什三藏が翻譯の時に書いてあるといふのは、實に何たる不思議な因縁であらうか。最爲第一の正法たる法華經と、最も理想的なる日本の國家といふものは、不思議なことに因縁關係があるといふ事が、今申す通り羅什三藏は天竺の北の方の龜茲國に生れた人である、さうしてこの話は天竺に於いて須梨耶蘇摩三藏が羅什三藏の頭を摩でて話をされたその中にある、これは傳説ではない、今の「翻經の記」に歷々と、而も佳い文章で書いてある。「此處だ」と日蓮聖人は考へた、法華經といふ一番立派な完成したる教が日本に縁がある、さうして日本といふ國は、この完成

したる國家がある、この理想的なる國家と理想的なる教が結合して、所謂法國相扶け合つて日本の國が榮えて行くかと思へば、こんな嬉しい事は無い。今一時その事に反對が起らうとも、それは一時の變態である、世定まり時至れば必ずや日本の國は、日蓮の言葉でいへば「國は靜まり法は澄めり」といふことになつて、國家安泰の日が至るに違ひないといふ悦びをお書きになつたのであります。それから、

此の大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を安置し、八宗の章疏を習學すべし。然れば則ち予所持の聖教多々これ有りき。然りと雖も兩度の御勸氣衆度の大難の時、或は一卷二卷散失し、或は一字二字脱落し、或は魚魯の謬候、或は一部二部損朽す。若し默止して一期を過ぐるの後には、弟子定んで謬亂出來の基なり。爰を以つて愚身老耄己前に之れを糾調せんと欲す、而るに風聞の如くんば貴邊並びに太田金吾殿越中の御所領の内、竝に近邊の寺々に數多の聖教等あり云々。兩人共に大檀那たり、所願を成せしめたまへ。涅槃教に云く、内には弟子有つて甚深の義を解り、外には清淨の檀越有つて佛法久住せん云々。(遺文錄)

これは實に大事な教訓であります、この法華經を弘めるに就ては、法華經の研究だけでは足らない、必ず一切經を安置して、法華經の傳道者は眼を一切經にそゞぎ、さうして八宗の章疏を習學しなければならぬ、唯だ自分の立場だけを知つて居るのではいかぬ、八宗の大事な學説といふものをすつかり學ばなければならぬ。それ故に日蓮が佐渡に流されたに就いても、他の物は何も持つて來なかつたけれども、一冊でも餘計書物が持つて來られるやうにと思つて來たけれども、何分流し者の身であつて澤山書物を持つて來ることも出来なかつた。曩には伊豆に流され、流罪中に大事な自分の書いて置いた物を散失したり、今度

は又佐渡ヶ嶋に流されるやうな事になつて、洵に大事な書物も散失したが、どうか自分の達者な間にそれを糾し調べて置きたいと思ふ。就いてはあなた方兩人——これは四條金吾と曾谷入道二人に當てられたのでありますが、あなた方はこの法を護る熱心な信者である事故に、あなた方の御領地の中に大分澤山お經があらうと思ふから、それをどうぞ送つて貰ひたい。涅槃經を抜けて見るといふこと、善い坊さんがあつて深い佛教の義理を研究し、外からは熱心な信者があつて佛法を助けて行くといふ事になつて居る、日蓮は佛教の眞義を探る上に熱心にやる積りであるから、あなた方はどうか之を助けてお經を送つて呉れよといふ事をお書きになつた。

今兩人微力を賜まし予が願に力を副へ、佛の金言を試みよ、經文の如く之を行せんに、徹し無くば釋尊正直の經文多寶證明の誠言、十方分身の諸佛の舌相有言無實と爲らんか。提婆の大安語に過ぎ瞿伽利の大狂言に超えたらん。日月地に落ち大地反覆し、天を仰いで聲を發し、地に臥して胸を押ふ。般の湯王の玉体を薪に積み、戒日大王の龍顏を火に入れしも今此の時に當るか。若し此の書を見聞して宿習有らば其の心を發得すべし。使者に此の書を持たしめ早々北國に差し遣はし、金吾殿の返報を取りて速々是非を聞かしめよ。此の願若し成せば峴崙山の玉鮮かに求めずして藏に收まり、大海の寶珠招かざるに掌に在らむ。(遺文四)

これは前に申す通り、あなた方二人が力を協はせて日蓮を助けて、「予が願に力を副へよ」と仰せられた。これは法華行者の忘れてならぬ事である、自分勝手議論を書くのではない、予が願に力を副へよといふのは洵に有難い事で、吾々のやうな不肖な者も、その努力は日蓮聖人の爲される仕事をお手傳ひして、日蓮聖人の大願の中に貢献するのだと考へれば、こんな愉快なことはないのである。であるからお前等二人力を協はして、日蓮の願に力を副へて貰ひたい、日蓮の願とは立正安國、往いては一天四海皆歸妙法、世界人類の歸着すべき大正法を打立てる所のこの大きな運動に参加せよ、これが法華行者の考へて置かなければならぬ事である。唯だ自分が御利益を受けるとかいふ事はかり考へて居つてはいかん。昔の信者を御覽なさい。若法華經の正法を擁護する爲に奮闘して居る。今日の信者はさういふことは少しも考へない、少しもという語弊があるけれども、大部分はドンドコはやるけれども、日蓮聖人の大主願の力にお副ひ申すやうなことは考へはしない、日蓮聖人の主願を破らうが、そんな事は俺は知らぬといふ譯でやつて居る、唯だお有難主義に陥つて居るが、それはいかぬ。

さうして日蓮聖人の願に力を副へて行くならば、「此の願若し成せば峴崙山の玉鮮かに求めざるに藏に收まり」で、一切の清き願望はこの廣宜流布の一願の中から湧いて來るのである。「大海の寶珠招かざるに掌に在らん」といふやうな譯で、廣宜流布の一願を以つて總ての事が成就するといふことをお示しになつた。自分の成佛も、親の成佛も、一切の事は法華經の爲に盡して行く中に保證される。國家的に言へば、忠君愛國の精神を以つて國家に貢献して行く中に、自分も子孫も國民全体も幸福が保障される、國民の忠君愛國の觀念が衰へて、個人々々の利益だけ考へて居つた時には、國民全体が苛い目に遣はされる時が出來て來る。それを今の學者がマゴ／＼して面倒臭く論じて、自分の權利を主張せよ、自分の利益を突つ張れと言つてやつて居るけれども、それだけでは必ずや所謂鰥蚌の争ひ漁夫の利となるのであつて、この日本のやうな未だ十分の勢力の無い國が、國民相互に相争うて居つたならば、他よりやられてしまふ、それは火

を賭るよりも明かな事である。議論も學問も要つたものではない、そんな事は唯だ考へて見さへしたならば知れるので、智者を俟つて後に知るべきにあらず、常識を備へた人間なら誰でも判るだらう。今この大事な國民の協同一致といふことを、舊い論だとか、國家々々と言つて國民を騙すのだといふやうな事を言つて人心を動搖せしむるのは實に悪い事である。何處までも國家は最後の最後まで大事なものである、その國家を通して國民の幸福も保全し、世界の文化にも貢献するので、國家を忘れては個人の幸福もなく、世界的文化にも貢献出来ぬといふ位の事は、皆心得て居らなければならぬ。それと同じ事で、それは國家的にいふからであるが、之れを宗教的にいふならば、一切の願望は法華經を擁護し、日蓮聖人の法華經宣傳の精神に参加して、どうぞこの正法の榮えますやうにといふ護法の赤誠を一貫する中から、あらゆる個人的願望が成就されるのである。この廣宣流布の一願に諸願成就するといふことを忘れぬやうに、之れを徹底して行かなければならぬ、下手な説教や演説をするより、法華信者であつたならば、廣宣流布の一願に諸願成就する、國家で言へば忠君愛國の一願の中に一切の國民の幸福もあり、世界の文化にも貢献するのであるといふことを、明かに意識して置かなければならぬ。その大事を忘れたならば、さう長たらしい面倒な事を考へる必要はない。それ故に纏めればこれが立正安國の大義となつて、法華經の御爲に、日本國の御爲に「法を知り國を思ふの志」と日蓮がいうたのは即ちそこである、その法と國とを結合せしめて、一面には法華經を尊び、一面には國家を重んじ、此の法は日本國に縁有り、此の國は此の法を得て大いに發展するといふ、その悦びの所に南無妙法蓮華經の信念が現れて居るのである。どうぞ左様な考へなつて、日蓮聖人の正しき教の流れを汲んでお出でになることを切に祈る次第であります。

### ◎東北巡教餘談

森川日修

五月上旬より下旬にかけて、東北地方北海道等を巡教した。上野から東北本線で、郡山で磐越線に東換へ、會津若松に下車した。若松は漆器の産地で可成りの市街であるが、維新當時の兵燹のたゞりか、概して各寺院の外形は完備してないのが多いやうに思はれた。我家の妙法寺は圓圓日什上人直建の靈場であるから、他の寺院のやうに衰頹してない事を念願しつゝ、妙法寺に詣つた。ところが本堂は轟然としてその棟高く、晝は日に映じて輝き表門黒闇の輝きでは庭園まで本山の威嚴あるを見て實に感しあつた。物故せられた坂本日桓大僧正が終身の蓄財全部を寄進して復興されたことであるから、若松市中特出してをるのは當然のこと、首肯された。桓師の高弟竹内僧正は師の遺命により妙法寺現置として教化に熱誠をこめられておるから、檀信徒も其徳に感じ、萬金の基本金を寄附するあり、今や妙法寺は内に大法弘運の導師あり、外に篤信外護の信士ありといふありさまである。ま

たトミ子夫人は心おきなく寺院に生活しうるは全く佛祖の御蔭なりとて、數百金を投じて本堂に天人奏樂を彫刻せる大欄間を寄進されてをる。是は實によい心がけである、寺院に生活する婦人はかくのごき感謝の念あつてこそ無言の教化をなすものである。妙法寺を出づれば、有名な白虎隊自刃の飯盛山が展開される、此の山から鶴ヶ城は眼下に見へる、昔時官軍が小田山から大砲を放ち一舉にして鶴ヶ城を黒煙濛々たる大火埃たらしめた、之を見た白虎隊十九名の青年は萬事休すまで自刃せる其意氣は壯烈の極である。市の東南にあたりて日什上人比叡山を退き會津に錫を留められた羽黒山東光寺の山がある。山の中腹に昔の隆盛を語る廣大なる礎石が残存してをる。其の山下に院内村と稱する小部落がある。五百年前日什上人東光寺に持住せられたる當時は、此の院内村は東光寺の寮所に關係があつたらうと村名から想像され

妙法寺より此山に至る途中に日什上人御入滅の靈場澤澤の妙河寺がある。私は非常に敬虔の心を以て御靈廟に参拜した。御靈廟は別に善美を興くしてをらぬが、簡素の玉垣を圍らしてある、御靈廟としては美を盡すよりも此の簡素清潔こそ洵にありがたく思はれた。彼の身延山の宗廟の御靈廟のやうに、いかにして養をうべきかの設備よりも嚴肅な心を以て無思の念がおこつてよかつた。此處を去つて山中に入れば、所謂の緑山溪谷の圓清泉流れ出づる東山温泉がある。私は風邪のため入浴はできなかつた。單に一瞥したのみであるが其景色は捨て難き風情があつた。會津を出て川桁へ來れば右に磐梯山は赤鬼の如く聳立し、今にも火炎を吐かんと威嚇するもの、如く、左の猪苗代湖は湛々として鏡の如く、其間に二十五六才の婦人が駿馬を牽きつゝ、股引やうの俗稱モンベを穿ち、俗談を唄ひながら家路に急いでをる。其の自然は實に微妙の一大繪巻物であつた。婦人は我家の子達を思ふて乳のふくらむを感じ、子達は垣根にそつて母の歸りを待つてをることだらう。

郡山より東北本線にて盛岡に至る。雨中に

て市内の詳細を見る事ができなかつたが、  
 偵察に次ぐ大都會である、此地は浮土真宗が  
 盛んなやうであつて、法華寺の隣りに真宗の  
 願教寺である、寺は曾て故地黙雷老僧の住  
 せし處で、今は鳴地大等氏が住職してゐる、  
 常に其宗の學者名士と稱するもの、往復頭繁  
 で傳道其他の事業に根強く勉めてゐるやうで  
 ある。法華寺に於ても地方の知識階級の人々  
 が時々會合し、日蓮主義を研鑽する云ふか  
 ら結構のこゝである。近時頗りに有名になつた  
 は大慈寺である、原宗の利用家が頻りに参拜  
 し、政友會々員、政友本黨々員と墓前に舞手  
 したり、離反したり、政治活劇の三番奥を行  
 ふところで、定めて地下の原教君、微笑した  
 り腹立しかつたりしてゐるこゝであらう。盛  
 岡は南部鐵道の本場である、或人の談に南部  
 鐵道は高價であるべきものである、然るに此  
 頃は何事も競争はやりで易く賣出すことを勉  
 めてゐる、従て南部鐵道の眞價を落すやうに  
 なる。中に某氏あり自分の銘を打ちし鐵道は  
 易く賣らぬ、さうまでも南部鐵道の眞價を發  
 揮せんと思はつてゐる。私は非常に面白く  
 此の談を聞いた。世は品物に限らず酒々とし  
 て買らんかな、自分で買き人を救く者

の多き中に、毅然として眞價を失墜せぬやう  
 に勉める人は眞の勇者である。  
 同じく東北本線にて青森縣八戸にいたる。  
 此處で天然生の葡萄からこつた果汁を食へた  
 此れは野生の葡萄を壓搾して製せし液であつ  
 て、五年十年を経過しても決して腐敗せず、  
 益々好飲料として年毎に價格を益すものであ  
 るやうである。

が、北海道は櫻の次が梅で、梅、櫻と咲くが  
 花の順序と思ふた私は、北海道では錯誤であ  
 ることを發見した。  
 札幌は北海道の中心都會たけあつて、市街  
 道路の井然たる、中央に花園ありて東西南北  
 の四區に列れ、いかに道路廣く秩序正しき  
 市街である。大學の構内も廣く、近き公園に  
 はアカデミー老樹枝を交へ、北海道昔時の大  
 原野を思はしめる。耕作は悉く馬を用ひ見渡  
 す限りの平野は内地と異なりて廣々してゐる  
 しかし山を見れば伐木のまゝで、植林せざる  
 ものが澤山見へるやうに思はれた。鐵路にさ  
 う植林は多く鐵道省の雪防林であつて、落葉  
 松は見ごころの若芽をたしてゐた。江別にいた  
 りは富士製紙會社の大製紙場があり、原料の  
 木材は山をなしてゐる。

青森より函館に至る連絡船は貨物車は其儘  
 船に入る位の大船であるから、客室食堂等完  
 備してをり、何等豪華なく僅か五時間位で達  
 するが、室蘭より青森にいたる船は小形の船  
 であつて、而も海上十一時間を要する、私の  
 乗船の日は風波荒く激浪連巻き船は木の葉の  
 やうに飄弄された。婦人の如きは直に寢室に  
 トウ／＼失敗に終つた。

盛岡より青森に至る各所に於て、田圃に放  
 牧してある馬はみものである、母馬が子馬を  
 伴ひ此處彼處の田圃原野に遊んでをる、沼崎  
 に至れば蓋か向ふは津輕海峡で、大波小波打  
 寄せ、波打ちわより廣き原野に小松雜草沼澤  
 が横き、其間に野馬三々伍々群をなして散れ  
 てをる、其狀を見て初めて馬の自然を知るこ  
 とができた。  
 津輕海峡を越へれば北海道である、北海道  
 はさすがに寒い、此頃は梅の盛りである、然  
 し寒國の習ひ梅櫻桃李一時に開くわけである

岩見澤で旭川行き方面と別れて室蘭へ走れ  
 は、白老と稱する處がある、此處にアイヌ人  
 が點在してをる、是より山を越へ里餘にして  
 其の部落があるやうである、アイヌ人も年々  
 内地人化し今は昔時の純アイヌ俗の原習を充  
 分知るは困難であるやうである。室蘭にいた  
 り時間に餘裕があつたから、アイヌ人と直接  
 話ししてみたと思ひ一里餘距りたるヤマッ

タに行き大失敗した、いたればヤマッは一  
 小街であつて、何等アイヌ人の家屋らしきも  
 のが見へぬ、車夫に何處にアイヌ人の住宅あ  
 りやと問へば、此の市街に雜居してをる、役  
 場に就て調査せば或は判明せんも、單にアイ  
 ヌ探検の風みゆれば彼等の感情を害するのみ  
 で、何等得るところがないだらうこのこゝで  
 あつた。北海の風未だ身に沁む中を疾走し、  
 トウ／＼失敗に終つた。

臥し見るも氣の毒のありさまであつた。食堂  
 に食をこりしもの私の外に唯一人だけであつ  
 たしかし私は北海道の氣分を味ははれたの  
 はありがたいと思ふた。  
 歸路仙臺より上野へは常盤線によつた、此  
 間百餘哩其間布敷上一ヶ所の記すべきなき  
 は遺憾である、某所に詳在せる寺院を此方面  
 に移轉することができた、強大の教線が  
 張れるがなと思ひなごした。常盤線は東北本  
 線と異なり右に海波を所々に散見し、左に大  
 小起伏の群衆今や新緑の裝をこらし、町村其  
 間に點在し、實に一大公園を疾走するの思し  
 だ。時々新聞等で國立公園設置の記事など見  
 ることがあるが、日本は何れに至るも公園で  
 あつて、特に國立公園など擴張する必要が  
 ないと思ふ。さうも日本人は何事によらず、

すぐ睡りしたがる悪い癖がありはしないか  
 勿來國を越へ川尻助川等に來れば、磐城炭礦  
 大倉炭礦其他多くの炭礦會社の採掘せる石炭  
 停車場に層をなし、工業資源を供給してをる  
 此のさまを見るに心強き感がおこる。しかし  
 此等の停車場から二三名の社員風の男子が突  
 込む、續て四五の電性が乗込み傍若無人の  
 振前するに閉口であつた。三等客車には券  
 簡に投れたる男が群居し、電性が二等車に酒  
 宴を催す。中には、父は困憊して三等車に眠  
 り、娘は二等車に社員の腕に絞るものもある  
 たらうと、それからそれと労働問題など考へ  
 出し、公園疾走の快感は消散してしまひ社會  
 問題など頭に浮んできた。寒い北海道から急  
 に東京へはいると、特に暑氣を感じ、頗りに  
 倦意を覺へた。



「虚妄をつかぬ玉様」

三 葉 作

雲が降りてゐるのかと思はれる様な静かな  
 松の緑の隅から大きなお城の高い家根が

空高く響えて居ます、めぐるお城の青々  
 とした水の中には今を盛りと赤白の水蓮が

咲いてゐる、鮮麗や顔は染しきつに水の中を  
 泳いでゐて、ほんごに繪巻物を見る様な静麗  
 さ……  
 このお城の玉様をステマ王と申します、非  
 常に學問の出來るそして慈悲深い人であり  
 ました、ですから大勢の家來達は神様のやう  
 に敬つて居りました。

王様はある日のことお室の中で、あたりを見張べながら御りこんな事を考へ始めました。「自分は毎日この様な綺麗なお城の中に住んでゐるのだ、國中で誰よりも一番大きなお家、そして誰よりも一番楽しい生活をして居るのだ！キレイな着物！甘い御馳走！何一つ自分の思ふまゝにならぬものはない、けれ共お釋迦様はお仰やる……人間は苦しむ……さ、なぜ人は苦しむのたらう？お金が欲しいからたらうか？欲はるかたらうか？いやくさうではない！では甘いものが食べたいからか？美麗な物が着たいからか……さうではない……ではナツペリ「虚妄」をつくらからか！さうした虚妄をつくらから、虚妄をつきたから！「人は苦しむ、さふはナツペリ虚妄をつくらから……私は虚妄をついてはならぬ……何んな事があつても虚妄をついてはならぬ、私はお釋迦様の教を堅く守りませう。」と、心の中に深く決心をしたのでありました。

ある朝のことでした、王様は只一人おしひでコツツお城を抜けて出られました、それは自分の國の家來達は毎日何をして居るかそれを見る爲めでありました、するに途上で一人のミスエラシイ哀れな乞食に出會ひました、乞食は苦しきさうに王様の側へアエキく交りました、そして「王様！私は二三日前から何にも食べないのでお腹がすいて堪りません、も早目が眩んで歩くことさへ出来なくなりました、何うぞお助け下さいませ……」と、兩手を合せて涙ながらに頼むのでした、慈悲深い王様は始終の話を聞きになりまして可愛さうに思召され何程かの錢をお與へになつてお仰やるには「私はこれから他へ出かけて行く處である、何れ夕方にはキツト歸つて来るから其の時お城へ尋ねて来るがよい！お汝の欲しいものを何んでも上げやう……」と言葉やさしく言ひ残してお別れになりました。

た、かくて王様は町から村へさだん々とお出になりました、そして色々々人民達の働いて居る有様を御覽になりました、其の内に山路へかゝつて來ましたが何うした譯か道に迷ふて終ひました、日はたんに暮れて來る道を尋ねるにも人は居らず、全く王様も途方に呉れてしまふました、處がこの山には大数の手下を持つて居る恐ろしい鬼神云ふ山賊が住んでゐたのでした、そして時々此山を通る旅人をオドシテはお金や着物を盗り、偉い人ならば皆縛つて岩屋の牢の中へキッ込んで置いて千人に成つたならば一度に首を切うと相談して居たのでした、今日も今しがた一人の偉い武士を捕まへたので丁度皆で九百九十九人だから、もう一人捕へれば千人に成る云ふので大いにお酒の酒宴を始めましたスママ王はさう云ふ恐ろしい山賊共が居る事は少しも知りませんから、一生懸命命を懸けてお出になりました、するに早くも見張をしてゐた一人の小賊がこれを見付けて頭の鬼神へ

注進する、それッ！云ふので大勢の山賊共は手に山又をヒツナゲて飛んで來ました、そして物をも言はずにスママ王を高て小手に縛り上げて終ひました、王様はあまり突然けでありますから夢では無いかと思ひましたが早何うする事も出来ません、終ひに持つて居るものは皆奪られてしまひました、そして同じやうに縛られたまゝ九百九十九人の牢屋の中へ千人の内の一人として入れられて終ひました。やがて頭の鬼神は大勢の手下を連れて牢屋の中へナツテ來ました、そして皆に云ひますには「丁度自分の思ふ通り偉い奴ばかり千人捕まへる事が出来た譯であるから明日は愈々此奴等の首を皆チョン切つてやるのだ！」と物凄く笑ひしやの顔に笑ひを浮べて憎々しげに申しました。

「いゝえ、私は命が惜しいので妻に別れるのが悲しいでもありません、私は今までの間に一度も虚妄をついた事が御座いません、けれ共今日は此處であなたの爲に捕へられて殺されたならば私が死んだ後までもスママ王は虚妄つきであつたさ人々から言はれねはなりません、それが悲しくて泣いて居るのです、實は今朝私が城を出る時一人のあわれな乞食さ「歸つて來たならば必ず汝に施行をする」約束をして來たのであつた、けれ共……私は早虚妄つきの罪を作つて死なねはならぬ……」と、又さめんに泣くのでありました、あまりに感人にカケ離れた答へて居りましたが、またあまりに清い話であ

りますから流石に鬼神の様な鬼神も非常に強く感じたさ見えて、大きな太息をついて靜かにうなづきながら「スママ王よ！ではお汝のそのウツクシイ心を信じて今日から一週間眼を興る故にあなたの其の約束をハメして來るがよい……その歸り七日経つたならば必ず歸つて來なければならぬ……」と手下に命じてスママ王一人だけの機を解かせ牢の外へ放ちました、王様は夢に見た心地で、それではキツト歸つて來るからと、急いでもこ來た道をお城へ歸つて行かれました。

この話をお聞きになりましたスママ王は大きな涙をこぼしながらあたりかまわず大聲で泣き出しました、情を知らぬ鬼神は眼をつり

「お前方はこれから國内のあわれな人々やお坊さんを皆此處へ集めて來る様に！」と、命



じました。そこで大勢の人々は手分をして王様の命のまゝに村から村へ町から町へこつたへましたので大勢の人々は舌もく／＼とお城をさして集まつて参りました。スダマ王は寶藏の戸を開いて珍らしい寶を望みに任せて少しも惜しまず施行しました。自分の思ふ存分施行をしたスダマ王は先の約束をハタタメ事をこころから喜んで、も早我願も満足した：

「ご皇太子に國を興へ位をお譲りになりました。愈々七日の日限も近づきましたから鹿神のこともへ歸らうと、皇子や家来達に別れを告げられます。皆々非常に嘆き悲しんで涙と共に「この上は兵隊を召集してお城を襲り、また我共は命に替へて防ぎますれば、若し何んが攻めて参りましたも恐るゝ事は御座いませんから山賊共の處へ御出にならる事はお止まり下さいませやう……」と再三再四止めましたけれ共、スダマ王は一向お聞き入れなく、返つて家来達にお仰やるには、「我が七日の國命を返はすことが出来た

のも正直であつたからである、又その上に自分の目的を通す事が出来たのである、も早命は惜くない、佛様は必ず正しい者を救つて下さるに定つて居る、虚妄をついてはならない！正直は立派な人さ成つて後には高い位に登る橋であり……虚妄は地獄へ行くと因である！」とお諭しになつて終ひに鹿神の所へお歸りになりました。

山賊の鹿神もヤクバ鬼ではありませんでした、此の美麗いスダマ王の心にスツカリ感心しまして今は涙を流さんばかりに改心の色を顔にて現はし

「王様！私は今まで慈悲さ云ふもの知らず居りました……王様！私しの罪を許して下さい！生き者で命を惜まぬものは

### 杜宇宛嘯、若葉匂ふ首夏の彩りの中に 第六部監督布教巡遊の跡

樺大僧正野口日主親下、中州から九州へ……(通歴記)

○東君の香輪すでに去つて、霧風南より來る

四月下旬、野口樺大僧正は監督布教の任を帯

びて、法輪を各地に轉ぜられた。言々悉く文化の内容を説き、句々是れ社會の進運を促しそれが宗教の使命であり、而して權威ある眞文明の建設に、不斷の健闘を續けることが、日蓮主義運動の方途であること絶叫された。

○四月廿一日(小雨)前夜來寢んでゐた天候も嵐島驛に着いた頃は、もう平穩に復つてゐた現下に従つて藝備線吉田口驛に向ふ。全地着。由來この地は、毛利公の政治思想に教養された所で、日蓮主義的思想には、當然耳を傾くべく因縁付られた地域であらねばならぬ。が安藝門徒に囑せられて、分水嶺のそれの如く、宗派的分派を固守して居る者が、多數を占めてゐるこのことだ。幸に新進氣鋭の布教家富元師が、錦を此地に留めて以來、盛んに法華經思想を振作し、民衆教化の必要を續吹しつゝあるといふ。午後八時から開催された日蓮主義講演會に参加せんこ、蓮華寺へ集つた士女、凡そ八十名、而も他宗門の徒その半數を占めてゐたことは、寔に悦ばしく効果の夥からざるものがある。「開會の辭」山主富元會衆師。「價值創造の宗教」中原通應師

「佛界緣起」無明緣起「野口日主親下。」  
○廿二日(晴)人車を借りて斐須丹比大徳寺に

着く。此地にも亦、江水悠々萬世に輝く大江弘元公の遺跡がある、山間僻邑の地を踏んで貴い教訓と過去の文化を物語る史實が見出される、許厚誠實、寺門の復興と正義の光輝に精勵する山主と、及び總代諸氏が、外護の任を究うぜんする。協力一致の宣傳に動かされ集ひ會する者堂に滿ちた。晝は二時半から、夜は八時から、二回に亘つて、ミツチヤミシた教義信條の講話を試みた。「開會の辭」山主登真智怒師(二回)。(晝の部)感激精神と歡喜の生活「中原通應師。「開會日什聖人を憶ふ」野口樺大僧正。(夜の部)「正しき法華經觀」中原布教師。「釋迦牟尼佛と法華經及び天照大神」野口親下。

○廿三日(快晴)、淡霞靨曇として自然の風光を彩り、恰も傳影鮮澤の一輪を展覧するやうな美を左右に抱擁しつゝ、再び吉田口へ道を通つた。左に毛利公の廟を拜し、その城趾を廻り、名にしおう江の川に架けられた大江橋を渡り進めは山川秀麗、得もいはれぬ感興をそゝられる、野口親下車夫の勢を慰むるもの、如く、一句を贈られた。

春は三月吉田の里は、松や藤蔭で程のよさ  
白雲に寫して猶仙境に遊ぶが如く、忙中亦閑

綽々たる斯うした餘裕を欲しく思つた。午後一時、井原市に着、雅味に富んだ川橋を越え高深寺の嶺に登つた。展望快調、裕に八萬石の領主の價値があること、現下はまたも微笑された。小徑を幾ふ三々伍々の求道者、貴い歩みをこの山へ運んで來る、やがて本堂は立錫の餘地なきまでに聽衆に埋められた。午後二時半、島田憲一師、開會を宣し、次の題下に獅子吼を試みた。「法華經に對する正しき理解」中原布教師。「三大秘法と身口意の修行」野口樺大僧正。

熱願求法の信徒は、更に夜の講演再會を欲求して止まなかつたので、午後八時からまた法輪を轉ずることとした。「開會の辭」山主長美明師。「法妙妙人貴」中原布教師。「寺院と六教」野口日主親下。

○廿四日(晴)、朝井原を發し矢へ向つた。十一時過純信知法の士、眞劍氏に着く、寔に氣持のよい家庭だ。周囲の信徒も亦、管絃以上の親しみがある、女性日蓮主義者として、會つて歸上に見えた加賀ヤイ女史の顔も現はされた。教界革新の方途を談じ、過去の消長史を聞かされて、教化の任重く重大なるを感じ且つ精進不退の願心をも發かれた。午後七時

旭町本布教所に法鼓を鳴す。「南洋行留別  
の辭」主任田中宣正師。「開法の精神」菅原富  
元會榮師。「教法と人格」中原布教師。「日蓮  
主義の各方面」樺大僧正野口日主現下。  
すさみ荒れにし南洋島へ、飢えて歸れや法  
の花 (野口祝下)

○廿五日(晴)、朝殿島へ向ふ。風光明媚の此  
別天地こそ、眞に俗塵を洗ふに相違ない靈土  
だ。浮世つかれて宮島行けば、さすが神代の  
風が吹く。野口上人の吟まれたこの句こそ、  
も早や説明以上の説明だ。かく歎美しつゝ、  
二人の姿は紅葉谷へ消えた。小淵幽邃御手  
洗川並より發し、譯々たる淡流をなし、兩岸  
に楓樹多く、危橋架り、奇岩怪石横る。の邊  
會ては偉傑伊藤博文公が歩をこの地に留め、  
名産宮島杓子を額ごなし、得意の詩を賦して  
揮毫されたといふ。

七州風物落眉間、千古英雄呼不還  
起猿歌欲問當歳、皇威今既迫臺灣  
この遺墨は、今岩廻の家寶となり、土蔵深く  
秘められて、見舞の一覽を寄島に許さないこ

うた。人様の輝きと、創造された眞價は、け  
に貴いものだ。せめて伊藤公遺愛の靈室に入  
つて、その氣分だけでも味つて見たい、と思  
つたまま崎環結佳の一室に座を占めん。これ  
は、俗客先約ありと迷られて能はず。浮世つ  
かれて宮島行けば矢張り浮世の風が吹く。の  
嘆を洩らさざるを得なかつた。予は町役場に  
疎り、更に町長の邸を訪れて來意を述べた。  
通する道、最も厚きを謝し、辭して野口上人  
の膝下に侍した。

○廿六日(快晴)、戸敷八百、人口三千八百を  
有する殿島町に、一種の廣告宣傳が行はれた  
それは小学校講堂に於て、午後一時を期し、  
講演會が開催せられるといふことであつた。  
至れば上級生徒及び一般聴衆、約二百五十名  
頗る盛會であつた。「開會の趣旨」校長坂田軍  
一先生。「三つの考察」中原通應師。「心の証」  
樺大僧正野口日主現下。

○廿七日(晴)、静波輝く海面を望み、露風徐  
ろに來るに浴して身心を洗ひ、殿島を辭し午  
後五時廣島に着き、妙詠寺に入つて講演の準  
備を整へた。午後八時開會。参禮者約八十。

「開會の辭」山主島田憲一師。「法華經に對す  
る一考察」中原布教師。「感應利益」野口監督  
布教師。  
一塊の鐵、百鍊能く名刀を出すの意氣と試練  
に、眞に生きんとする若人山主の熱誠と、誠  
心誠意、能く外護の任に中る總代諸賢の美し  
い情を察し、心ゆくまで法悦を感じた。

○廿八日(晴)、午後二時、大手町本蓮寺に於  
て、日蓮主義講演。「開會挨拶」山主渡邊四遊  
師。「人格價値と教法」中原通應師。「立教開  
宗の精神と其修行」野口日主上人。  
○廿八日夜八時、本願寺本堂には多數の参禮  
者があつた、野口樺大僧正導師の下に、壯嚴  
な立教開宗記念法要が竣修せられ、玄題唱和  
の聲は堂外遙かに傳へられ、來會の大衆は一  
入緊張球を濃厚に表示してゐる、法要後講演  
會が催された、集ひ來る者既に二百二十名、  
教界の新人として敬慕する山主の傳道振りが  
貴くも此法座の中に合掌された。一、宗歌  
一同唱和。「開會の趣旨」山主野口日主現下。人  
格價値の創造と法華經「中原布教師。「朝鮮  
滿洲支那佛教と日本佛教」野口樺大僧正。

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供  
設計監督 (三年以上水苔乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、  
文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の  
設計又は監督の御依頼に應じ可申候工事の大小に  
拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御  
入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水苔乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水苔不  
充分なる檜材は于前狂ひ等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ関町十六番地  
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

神奈川縣 鶴見町 (電話青山六〇二八番)

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所 (電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所 (電話西三二二四番)

臺灣檜材の特大特徴

一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理整然木
六、木高稚色

昭和二年七月廿五日印刷  
昭和二年八月一日發行  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地 (第三百八十九號)

統 一 定 價		統 一 廣 告 料	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾圓
半冊	金壹圓貳拾錢	一頁	金拾圓
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	四分一頁	金九圓
	送料共	一頁	金五圓
	送料共		金四圓
	送料共		金三圓
	送料共		金二圓
	送料共		金一圓

編輯兼 發行所 編輯所  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
印刷所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
印刷所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所  
編輯所 統一編輯局  
名古屋市東區田代町字城山七十七番地  
電話東京五一〇七一番  
電話名古屋一〇八一九番



目 次

菩薩行に就て.....	井	本	多	日	生
信行の基調を説ける観普賢經.....	井	村	日	成	
統一團の回顧と自警.....	本	多	日	生	
結核國日本.....	石	田	誠		
聖訓摘要.....	本	多	日	生	
自然療養の話.....	奥	田	史	郎	